

— 原著 —

理想自己を志向することの意味

— その肯定性と否定性について —

水間 玲子

— 意見 —

水間論文へのコメント

高橋 紀子

水間論文「理想自己を志向することの意味」から思うこと

伊藤美奈子

— リプライ —

水間論文「理想自己を志向することの意味—その肯定性と  
否定性について—」に対するコメントへのリプライ

水間 玲子

## 理想自己を志向することの意味

— その肯定性と否定性について —

水間 玲子<sup>1</sup>

The Meaning of Intention Toward Ideal Self  
— An Investigation on Positive and Negative Aspects of it —

Reiko MIZUMA<sup>1</sup>

The purpose of this study is to clarify the meaning of orientation toward ideal self, i.e., the orientation toward actualization of ideal self, from both positive and negative points. We examined positive meaning from the relationship between orientation toward ideal self and the degree of self-development and negative meaning from the relationship between self-evaluation and orientation toward ideal self. We requested 638 university students to answer the questionnaire.

As a result, it was shown that orientation toward ideal self was significantly positively related with expectation of future self-development and evaluation of past self-development, and it insisted that orientation had positive meaning on this point. The negative meaning of orientation toward ideal self, however, couldn't be found clearly. With further investigation, which implied that orientation toward ideal self was also related with acquirement of steps and acts to actualize ideal self, these results would be caused not only because that orientation toward ideal self meant the strength of one's heart but also because that it was followed the steps or acts to actualize ideal self.

Key words: ideal self, intention, self-development, self-evaluation

### 問 題

理想自己の問題は、古くから適応の文脈で問題にされてきた (cf. Rogers, 1951)。適応的な人は理想自己と現実自己の不一致が小さいのに対し、不適応的な人はそれが大きいというのが一般的な見解であった。だが、長い年月の間にその概念はより細分化されたものとなり (e.g., Higgins,

1987)、問題意識の設定も変化してきた (cf. 遠藤, 1991; Katz & Zigler, 1967; Zimmer, 1954)。それでも、理想自己と現実自己の不一致と適応との関連は、まだなお議論され続けている話題である (e.g., Katz & Farrow, 2000)。もちろんその議論内容も発展しており、文脈を考慮しながら理想自己と現実自己の不一致の問題を考えていこうという研究も近年では見受けられるようになっていく。水間 (2001) は自己形成意識を、新井 (2001)

<sup>1</sup> 奈良女子大学文学部 (Nara Women's University)

は不合理な信念という軸を設けて、その程度の違いによって理想自己と現実自己の不一致と適応との関連の仕方が異なるという見解をうちだしている。

理想自己に関するそのような議論が発展する中で、Achenbach & Zigler (1963) や加藤 (1977) などは、古くから、理想自己に関わる問題は発達との関連においてとらえ直されるべきであると指摘していた。桂・加藤 (1959) の調査によると、中学生から高校生にかけて両者の不一致が大きくなって不適應的となると単純に解釈するのは問題であり、それは、理想自己と現実自己の不一致を認め、そこから理想に向かって歩もうとする青年的な姿勢を考慮して解釈していかねばならないと加藤は述べる。これは、理想自己と現実自己の不一致やそこにおかれる否定的様相の意味そのものに対する問い直しを促すものである。自己概念そのものが形成の過程にある青年期では、特に理想自己は個人にとって重要なものとして受け止められる (北村, 1962)。それに一致しない現実自己の否定性に直面しながらも、青年はその理想自己を捨てきれないでいる (北村, 1955)。そしてその心性は青年期における自己の否定的様相を深刻化させるが同時にそれを乗り越える力ともなる (屋野, 1978)。それらのことをふまえれば、加藤の指摘は十分に納得のいくものである。水間 (投稿中) では、自己嫌悪感という、いわば自己への不適應感が、自己変容を促す契機ともなることが明らかにされている。

だがここで注意しなければならない点を2点あげることができる。一つは、それらの指摘が、単に、理想自己と現実自己の不一致や否定的状態が意味あるものである、と主張しているわけではないということである。それが自己形成においておそらく有効に機能し、個人の成長へとつながる可能性があるという点において、意味がある不一致であり、否定性であると考えられているのである。「現実の自己に関するイメージとそれ (志向的・理想的な自己像) との食い違いの意識がバネ

となって新たな行動への意欲が生じ、長い眼でみるならばそうした志向的・理想的な自己像の方向へ向かって主我自体の形成がなされていく (梶田, 1988, p.86; 括弧内筆者)」というプロセスを前提とする中で、成り立つ議論なのである。

二つ目は、理想自己を志向することそのものが、否定的意味合いをもって解釈される場合があるという点である。Burns (1980) や Rosenberg (1979) は、人は、時に完璧な人間を目指そうとするあまり、失敗を過度におそれたり、他者の評価に過敏になったりすることがあることを指摘している。Frankl (1946) は、自己中心的な意識から脱して問題中心的でなければその苦しみから解放されないというし、森田 (1924/1995) などは、何かを求めぬ気持ちを徹底的に除くことで適応に向かうことを理論化している。たとえ理想自己が非現実的なものでなくとも、その実現を求めることが自己に対する注意の膠着をもたらしたり (坂本, 1997)、理想自己に一致しない自己の否定性に直面させ続けたりすることで、成長するどころかかえって停滞を招く可能性も十分指摘される。その際の負の影響は、義務自己 (Higgins, 1987) を求める場合に比べると、理想自己の場合はまだ小さいと考えられてはいるが (稲垣, 2001)、理想としているものがいつしか義務的に感じられてしまうことも十分ありうる (新井, 2001; 水間, 2002a)。また、水間 (投稿中) では、否定的自己からの脱却をはかろうとすることは、その場における短期的な解決には結びつきにくいことを明らかにしている。これらは、理想自己を志向するがゆえの弊害であるといえる。

これらのことをふまえると、理想自己を志向するということが一体いかなる意味をもつのか、改めて検討していく必要が生じる。まず、これまでの議論をまとめると、理想自己を志向することの弊害がもっとも指摘されているのは、現在における適応を損なう側面があるという、適応をめぐる議論であり、そして、理想自己を志向することに価値がおかれるのは、それが自らの存在を問い直し、自己形成を促す側面があるという、自

己形成や発達に関する議論においてであるということができよう。そこで、本研究ではこの両側面との関連を通して、理想自己を志向することの意味を考えていくことを目的とする。特に先述の議論をふまえ、自己形成の営みのさかんな時期にいると考えられている青年に焦点をあて、ここでは青年期後期に該当するとされている大学生を対象に検討をおこなう。

理想自己を志向するということの肯定的意味は、理想自己の志向性と自己形成との関連において確認されるはずである。理想自己の志向性が肯定的に作用している場合、その志向性によって理想自己の方向への自己形成が促されると考えられるからである。そこでまず、本研究では、理想自己を実現していこうとする志向性と個人の理想自己の方向への自己形成の程度がいかなる関係にあるのかを検討していくこととする。理想自己の志向性の肯定的側面に焦点を当てた場合、理想自己の志向性が高いほど、理想自己の方向への自己形成の程度が高いと考えられ、以下のような仮説が設定される。

仮説1：理想自己の志向性の高さと理想自己の方向への自己形成の程度とは正の関係にある。

しかしながら、理想自己の志向性の高さによってもたらされる弊害を考慮すると、この仮説が誰においてもあてはまるわけではない可能性が予想されてくる。理想自己を志向してはいるものの、なかなか成果を実感できないという者は、その志向性の高さと裏腹に、自らの自己形成の程度を感じる事が難しい状態にあると思われるからである。ただし、この自己形成を、今後自らがどのように理想自己の方向へと近づいていくのかという観点でとらえるならば、理想自己の志向性と自己形成との間に正の関係を想定する仮説は支持されるであろうと考えられる。理想自己の志向性には、現在の自己のあり方はともかくとして、今後の自己に対する可能性や期待とがこめられているであろうと予想されるからである。つまり、上記の仮説は、特に現在から未来にかけての自己形成の予測について、積極的に支持されるであろうと

考えられる。そこで本研究では、理想自己の方向への自己形成の程度を、過去から現在においてどの程度それがなされたのかという成果と、現在から未来にかけてどの程度なされていくのかという予測とに分けてそれぞれ検討していく。その場合、上記の仮説は以下のように修正される。

仮説1'：理想自己の志向性の程度と自己形成の程度とは正の関係にある。特に、現在から未来にかけての予測との間において、過去から現在までの成果との間における関係よりも強い正の関係がみられる。

この仮説1'においてより積極的に指摘される理想自己の志向性と自己形成との関係を導く上記の根拠は、現在において感じている未来との関係をふまえたものである。そこで、併せて未来イメージとの関連も検討し、仮説1'の成り立つ背景について確認することとする。ここで設定される仮説は以下の通りである。

仮説2：理想自己の志向性の高さは、未来イメージの肯定性と正の関係にある。

理想自己を志向することの否定的意味は、先も述べたが、現在における適応をおびやかすという点にあると考えられる。ただし、この関係については、一概に線形的な関係を想定できない。第一に、理想自己を志向することによって自己形成が促されるのであれば、それは現在においても肯定的な影響を及ぼすことも十分予想されるからである。目標研究においては、たとえ目標が達成されていなくとも、それに向かっているということ自体がポジティブな感情を引き起こすと考えられてもいる (Carver & Scheier, 1990)。つまり、理想自己の志向性と現在における適応との関係は、それを負のものとして持っている者のみならず、正のものとして持っている者も存在するのではないかと考えられる。第二に、理想自己を志向することは、否定的自己に直面することによって促進されることもある一方で (水間, 投稿中)、人は現在の自己を十分に受け入れ自尊心が保たれている場合にはより向上をめざす (Rosenberg, 1965) という指摘からは、肯定的な状態のゆえに

促進されることも十分に考えられるのである。

その場合、理想自己の志向性と現在の適応との関係は全体としては正・負相殺しあい、あまり明確な関係としてとらえることができないと予想される。それでは、両者、すなわち、理想自己の志向性と現在の適応とが相互作用しあう場合と、理想自己の志向性と現在の適応とが拮抗する場合とを規定するものは何か、この点について考えていくことが求められる。

理想自己の志向性と現在の否定性との関係をもつ理由としては、その志向性が理想自己に一致しない否定的自己に直面することを伴うというものをあげることができるであろう。理想自己と現実自己の不一致が否定的感情を喚起させるからである (Higgins, 1987)。ただしこれについては、自己形成への意欲や成長への欲求といったことが、否定的感情の喚起を抑え、全体的な自己評価の低下を抑制する役割を果たすことが水間 (2001) で明らかにされている。また、否定的自己の直面による否定的感情の低減方法については、人はいくつかの手段をもっていることも知られている (cf. Baumeister, 1998)。ただ、その自己への意識が持続する場合は問題である。自己への意識の高さの悪影響としては、たとえば否定的な感情が増大したり (Gibbons, et al., 1985) 否定的な記憶を思い出したりすること (Pyszczynski, et al., 1989)、悲観的な予測をするようになること (Pyszczynski, et al., 1987)、原因を自己に帰属しやすくなるため (Buss & Scheier, 1976; Duval, Duval & Neeley, 1979)、失敗など否定的事象についても自己に帰属してしまうこと (Greenberg, et al., 1992) などが特に抑うつ傾向との関連において明らかにされている。理想自己を志向するという文脈であっても、自己への意識を持続させてしまう場合にはこのような否定的な現象があてはまる可能性は十分ある。しかもその場合、新たに直面する挫折感や悩みなども、より強烈なものとして感じられてしまう。このような現象に陥ってしまった場合、めざす理想自己は、自己形成を促す指針というよりも、否定的自己を認識させてし

まうもの (Horney, 1945) として個人の意識に位置づけられてしまうと考えられる。

一方で理想自己が自己形成において肯定的な役割を果たす場合、それは個人の具体的目標となって行動を促すということが知られている (cf. 遠藤, 1991; 水間, 1998a)。ここからは、以下のように考えていくことができる。すなわち、理想自己が向かうべき目標として実際の行動を促すものとしての役割を果たすことができている場合には、それは現在においても肯定的な影響をおよぼす、逆に、理想自己はめざすものとしては存在しながらも、実際的な目標として個人の行動を促すまでに至っていない場合、それは現在における停滞を招き、否定的な影響を及ぼす、ということである。この予想を支持するものとして、尾崎 (2001) の将来展望に関する研究をあげることができる。尾崎はその者の現在充実感を規定するものが、将来の見通しに対して実際に何をすべきか、という手段についての理解とそれに伴う行動のあり方にあることを指摘している。理想自己を志向していても手段や行動が伴わない場合、その志向性の高さはむしろ否定的な影響をもたらすという構図が想定されてくるのである。

以上のことをふまえると、日常的に理想自己と現実自己の不一致にとらわれている者において、そして、理想自己を志向しながらも実現していくための手段や行動が伴わない者において、理想自己の志向性のもつ負の意味がより顕著に見受けられるであろうと考えられる。よって、以下の仮説が成り立つ。

仮説3：理想自己と現実自己の不一致に意識がとらわれている者においては、理想自己の志向性の高さは現在の自己の否定性と関連する。

仮説4：理想自己を実現していくための手段や行動が伴わない者においては、理想自己の志向性の高さは現在の自己の否定性と関連する。

これらの検討を通して、理想自己の志向性の意味について考えていくことを本研究の目的とする。すなわち、理想自己を志向する程度と理想自己の方向への自己形成の程度および現在の自己に

対する評価との関連を検討し、そこから理想自己を志向することの肯定的側面、否定的側面を明らかにしていこうとするものである。なお、自己形成の程度については過去から現在までの自己形成の成果についてと、現在から未来にかけての自己形成の予測について分け、それぞれについて検討していく。また、現在の自己に対する評価については、その様相をより細かにとらえるため、ここでは個人基準/社会基準および肯定次元/否定次元を区別しながら考えていくこととする。

## 方法

### 調査対象

関西地区の大学生638名 (男子239名, 女子399名)<sup>1)</sup>。平均年齢は19.2歳 ( $SD=1.1$ ) であった。

### 手続き

以下の質問を一冊の冊子にまとめ、配布、回収した。調査は一斉調査であり、大学の講義の前後いずれかにおいて筆者あるいは授業担当者が教示を行い、回答させた。

### (1) 理想自己の記述

以下のステップによって被験者自身のこうありたいという理想自己を自由記述で表出させた。

① WHY 答法：溝上 (1997a) による。内省へ導入するために用いた<sup>2)</sup>。

②理想自己の表出：①の自由記述欄につづいて「次に、あなたは、どういう人間でありたいと思っているのかを考えてみて下さい。あなたが『自分ももっとこういう人間になりたい』という理想の自分について、下に自由に書いてください」という教示を与え、理想自己について自由に表出してもらった<sup>3)</sup>。

③理想自己の選択：自己形成意識の対象となる理想自己を一つに限定していくため、②で記述した内容のうち、最も重要なものを選択させた。教示は以下の通りであった。「今、前のページの②に書いたものの中から、あなたにとってもっとも重要であるものを、下の [ ] に書いてください。(いくつかに分けて書いたものが一つにまと

まるのであれば、まとめてもかまいません。) 一つしか書いていない場合も、ここに書き写してください。」この教示の後に四角い枠を設け、そこに記入させた。

### (2) 理想自己の志向性

理想自己の志向性を測定するため、理想自己の実現を普段の生活においてどの程度求めているのかについての項目を設定した。梶田 (1988) の自己成長意識尺度、井上 (1999) の向上心尺度などを参考にし、「いつも、〇〇を実現していこうという気持ちがある」、「〇〇の実現がたとえ困難なものだとしても、それに向かっていきたい」など理想自己の実現をめざす意識を表す項目を中心に、「〇〇は、理想にすぎないので、特にそのために何かをするというようなことはない」など逆転項目も含め、12項目作成した (Table 1)<sup>4)</sup>。各項目に対して、「全くその通りだ」～「全くそうではない」の7件法で評定を求めた。

### (3) 理想自己と現実自己のギャップを意識する程度

「あなたは、今の自分と〇〇とのギャップを意識することが普段どのくらいありますか」という質問に対し、「非常によくある」～「全くない」の7件法で評定を求めた。

### (4) 理想自己実現手段の有無

「あなたは、〇〇の実現のためにどうしたらいいか、具体的な手段 (プラン) をもっていますか」という質問に対し、「もっている」または「もっていない」の2件法を求めた。

<sup>1)</sup> 欠損値のあるデータについては分析ごとに除外した。そのため、分析によってこれより少ない人数が対象となっている場合もある。

<sup>2)</sup> これは従来箇条書き形式がとられていたが、本研究では内省へ導入するステップであるため、より自然な記述ができるように、罫線を設け、自由な文体で記述してもらう方法をとった。

<sup>3)</sup> ここでも①同様、罫線を設け、そこに自由な文体で記述させた。

<sup>4)</sup> ここで「〇〇」と記載したところは、(1)の③において最終的に選ばれた理想自己をあてはめて考えるようにあらかじめ教示を記載しておいた。

Table 1 理想自己の志向性を問う項目

項目	内容*
1.	〇〇の実現に対してふだんから深く関わろう(取り組もう)としている
2.	〇〇を実現させるために、できる限り努力しようと思う
3.	自分がたとえ〇〇と違っていても、理想は理想だからそれでいい*
4.	どうすれば〇〇を実現できるか、常に考えている
5.	たとえ周りが反対しても、〇〇の実現のために頑張っていこうと思う
6.	もしも〇〇を実現できなくても、それはそれで仕方がない*
7.	〇〇の実現がたとえ困難なものだとしても、それに向かっていきたい
8.	〇〇の実現のために全力を尽くそうと思う
9.	いつも、〇〇を実現していこうという気持ちがある
10.	〇〇を実現したいと思いつつも、本当はどこかあきらめているところがある*
11.	できるなら〇〇以外の別の理想を見つけていきたいと思う*
12.	〇〇は、理想にすぎないので、特にそのために何かをするというようなことはない*

\*のついた項目は逆転項目である。

(5) 理想自己実現行動の有無、および行動希求の有無

(4) において「もっている」と答えた人に対しては「あなたは、〇〇の実現のために、実際に何か行動していますか」という質問に対して「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求めた。(4)において「もっていない」と答えた人に対しては「あなたは、〇〇の実現をめざして何か行動をしたいと思っていますか」という質問に対して「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求めた。

(6) 理想自己の方向への自己形成の程度

自分が求める方向である理想自己にどの程度変化したのか、あるいは変化していくのかについて、それぞれ評定指標と数値化指標の2指標においてたずねた。評定指標では、「〇〇という理想を感じ始めた時点から今までの間で、自分はどのように変化してきたと思いますか」という問い(過去-現在問)に対して「以前より非常に理想に近くなった」～「以前より非常に理想から遠くなった」の7件法での回答、および、「今のあなたは、これからどのように変化していくと思いますか」という問い(現在-未来問)に対して「今

よりも非常に理想に近くなる」～「今よりも非常に理想から遠くなる」の7件法での回答を求めた。数値化指標では、理想自己を10とした際に過去の自分、現在の自分、未来の自分はどのような位置づけをとるのかについて、10段階の目盛りをつけたグラフへの記入を求めた。「〇〇を10とした場合、自分はどの位置にいますか。〇〇という理想を感じ始めた時点-現在-未来の間での、自分の〇〇に対する位置の変化について、例にならってグラフを回答欄に書いてください。」という教示を与え、Figure 1のような例および回答欄を設けた。

(7) 未来イメージ

都筑(1993)による未来イメージ尺度(20個の形容詞対からなるSD法尺度)。各対の間を7段階に区切り、該当するところに○をつけるよう求めた。

(8) 自己評価

溝上(1999)による自己評価尺度28項目。これは自己評価の肯定次元と否定次元の独立性、および、自己評価基準における個人基準と社会基準との区分を想定した尺度である。「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の5件法でたずねた。

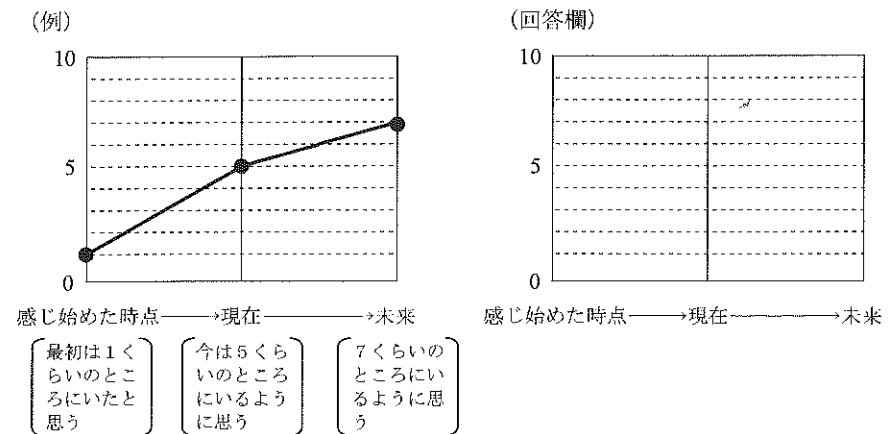


Figure 1 理想自己への変化の程度に関する数値化指標の回答欄\*  
\*理想自己に対する現実自己の位置の記入例および回答欄を示している。

## 結果

### 1. 結果の処理手続き

#### (1) 理想自己の内容

自由記述によって求められた理想自己の記述内容は、人間関係に関するもの(例:思いやりのある/好かれる/誰とでも話せる)、行動傾向に関するもの(例:積極的/要領のよい/きちんとしている)といった人生いつの時点においても問題となるような領域に関する内容(溝上・水間, 1997)はもちろん、自己の確立に関するもの(例:自分をしっかりとった/他人とはちがう自分をもつ)、自己実現に関するもの(例:言いたいことを言える/信念に従って動く)、自己に対する態度について(例:自分に自信をもつ/あるがままに/自分に厳しい)といった自己のあり方そのものを問い直す内容、また、人間的成熟に関するもの(例:まわりがよくみえている/精神的に強い/器の大きい)、生き方に関するもの(例:成長していく生き方/後悔しない生き方をしたい)などもみられ、これらに類すると思われる記述が多くを占めていた。また、「自立したい」といった、青年期独特ともいえる内容もわずかながら見受けられた。全般的に、本調査で得られた理想自己の内容は、そのまま具体的な行動目標としてとらえられるものよりは、めざすあり方や態度、性

格を求める抽象的な内容が多かった。

なお、「完璧な人になる」といった記述もわずかにみられた。問題部分で述べたように、そのような理想自己は幻想であり、抱くこと自体が不適応的とする見解(Burns, 1980; Horney, 1945; Rosenberg, 1979)をふまえると、その理想自己の設定自体を問題にしなければならないとも考えられるが、完璧の基準や完璧の示す範囲によっては、一概に判断できない。本研究で問いたいのは、そのような理想自己也含め、実現を求めることがいかなる意味をもつのかということであるため、これらも除外せずに分析対象とすることとした。なお、「魔法使いになる」など明らかに非現実的で他の理想自己とあまりに次元が異なると思われるような理想自己は、本研究では見受けられなかった。

すなわち、ここで扱われた理想自己は、それを志向するという文脈のもと、議論していくに値するものであると考えられた。

#### (2) 理想自己の志向性に関する尺度

「全くその通りだ」を7点～「全くそうではない」を1点として得点化した。逆転項目については逆に得点化し、12項目についての信頼性をクロンバックの $\alpha$ 係数によって求めたところ、 $\alpha = .873$ と十分に高い値を示していた。各項目の

得点と当該項目を除いた11項目の合計得点との相関についても、極端に信頼性を低下させている項目は見当たらなかった。以後、この12項目の合計得点をもって「理想自己志向得点」とよぶ。理想自己志向得点の平均値は59.2点 ( $SD=11.9$ ) であった。

(3) 理想自己の方向への自己形成の程度

評定指標については、「以前より非常に理想に近くなった」を7点～「以前より非常に理想から遠くなった」を1点、「今よりも非常に理想に近くなる」を7点～「今よりも非常に理想から遠くなる」を1点とし、それぞれ評定の段階に応じて得点化した。以降、これらをそれぞれ、「成果評定得点」、「予測評定得点」と表記する。各得点の平均値はそれぞれ4.55点 ( $SD=0.99$ ), 5.04点 ( $SD=0.98$ ) であった。

数値化指標については、まず、過去・現在・未来におけるそれぞれの自己の位置づけについて、目盛りにしたがい0点～10点と得点化し、「現在の数値-過去の数値」、「未来の数値-現在の数値」の差をそれぞれ求めた。さらに、それがどの程度の変化可能範囲における変化であるかを求めるため、この差の値をもとに、以下のステップによって数値を算出した。まず、「現在の数値-過去の数値」が正である者については、理想自己の位置である「10」と過去における現実自己の値との差を変化可能範囲とし、そこにおける割合を求めた。「現在の数値-過去の数値」が負である者については、過去の値から最も理想自己から遠い位置とされている「0」との差を変化可能範囲とし、そこにおける割合を求めた。この数値を過去から現在における自己形成の成果に関する数値化指標によって得られる数値とし、以後、「成果数値」と表記する。現在から未来における自己形成の程度の数値化指標についても、同様のステップで得点をもとに求めた。以後、その得点を「予測数値」と表記する。以降、この値を、「成果数値」、「予測数値」とそれぞれ表記する。各数値の平均値はそれぞれ.192 ( $SD=.299$ ), .420 ( $SD=.330$ ) であった。

(4) 未来イメージ尺度

未来イメージ尺度については、形容詞対の右端を7点～左端を1点として得点化した。この得点化により、得点の高さは未来に対する意識の肯定性を示すこととなった。尺度の信頼性をクロンバックの  $\alpha$  係数で求めたところ、.903と十分に高い値を示した。ただし、項目8 (ゆっくりとした-はやい), 9 (困難な-容易な), 10 (遠い-近い) は、項目の得点と総得点 (当該項目を除いた全項目の合計得点) との相関がほとんどなく (順に  $r=-.046$ ,  $r=.172$ ,  $r=.072$ )、識別力が低いとみなされたため削除した。17項目におけるクロンバックの  $\alpha$  係数を求めたところ、 $\alpha=.930$  とさらに高い値を示した。そこでこの17項目をもって未来に対する肯定的な意識の項目とし、17項目の合計得点を求めた。以後、この得点を「未来イメージ得点」と呼ぶ。得点の平均値は81.6点 ( $SD=16.4$ ) であり、この得点が高いほど、未来イメージが肯定的であることを示す。

(5) 自己評価尺度

自己評価尺度については、28項目に対して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、先行研究と同様4因子を得た。その中で、どの因子にも高く負荷しない項目および逆転項目としていづれかの因子に負荷してまった項目を除き、再度同手法による因子分析を行い、最終的に Table 2 の結果を得た。第一因子は「個人基準肯定的自己評価」因子、第二因子は「社会基準肯定的自己評価」因子、第三因子は「個人基準否定的自己評価」因子、第四因子は「社会基準否定的自己評価」因子であった。各因子に高く負荷する項目の合計得点を算出し、それぞれ順に「個人肯定得点」、「社会肯定得点」、「個人否定得点」、「社会否定得点」と名づけた。各得点の平均値はそれぞれ順に、27.1点 ( $SD=6.3$ ), 12.3点 ( $SD=4.0$ ), 25.9点 ( $SD=5.0$ 点), 14.0点 ( $SD=4.2$ ) であった。

なお、自己評価得点については男女による有意な得点の差がみられ、個人肯定得点、社会肯定得点については男性の方が有意に得点が高く (順に

Table 2 自己評価尺度 (溝上, 1999) の因子分析結果

項目 <sup>a, b</sup>	回転後の因子パターン				共通性
	I	II	III	IV	
<b>【第I因子：個人基準肯定的自己評価因子】 <math>\alpha=.877</math></b>					
8. 私は、理想通りではないが、自分というものが好きです	.869	-.040	.153	-.005	.608
3. 私は、現在の自分が幸福だと思います	.818	-.027	.109	.151	.434
12. 私は、現在の自分に満足しています	.774	.050	-.097	.080	.642
15. 私は、自分自身を受け入れ認めています	.769	.017	.072	.015	.533
11. 私は、自分に対して非常に肯定的です	.655	.049	-.117	.023	.539
16. 私は、自分の一つの面がだめだからといって、自分全体がだめだとは思いません。	.607	-.064	.157	-.279	.512
5. 私は、よい点を多くもっていると思います	.430	.310	.168	-.199	.519
18. 私は、たとえ人に自慢できるものがないとしても、卑屈になったりはしません	.415	-.046	-.192	-.064	.327
<b>【第II因子：社会基準肯定的自己評価因子】 <math>\alpha=.795</math></b>					
21. 私は、自分のことを周囲の人とは異なるすぐれた存在だと思います	.008	.836	-.002	.191	.571
25. 私は、いろいろな点で人より優れていると思います	-.034	.820	-.058	-.029	.702
13. 私は、自分の知っている人々が、いつかは自分を尊敬の眼をもつてあおぎみる日がくると確信しています	-.119	.676	.069	-.101	.441
19. 私は、自分のいろいろな能力について自信をもっています	.201	.532	-.030	-.107	.548
23. 私は、自分自身を非常に頼もしい人間だと思います	-.017	.447	-.081	-.155	.324
<b>【第III因子：個人基準否定的自己評価因子】 <math>\alpha=.848</math></b>					
6. 私は、時々自分自身が嫌になるときがあります	-.058	-.037	.729	-.030	.576
9. 日によって、自分自身を好きになったり、嫌いになったりします	.285	-.051	.700	-.033	.349
4. 私は、今のままの自分ではいけないと思うことがあります	-.071	-.077	.614	.019	.484
20. 私は、自分自身の中に変えたい部分がたくさんあります	-.194	-.092	.534	-.021	.472
14. 私は、自分自身についての見方がころころ変わります	.185	.065	.533	.056	.221
7. 私は、自分自身を非常によく責めるたちです	-.196	.109	.467	.110	.402
10. 今の私ははがゆくて仕方がありません	-.337	.085	.450	.003	.444
<b>【第IV因子：社会基準否定的自己評価因子】 <math>\alpha=.791</math></b>					
26. 何かにつけて、自分は役立たない人間だと思います	.008	.038	.079	.814	.692
1. 私は、社会のために何の訳にも立たない人間だと思います	.034	-.106	-.133	.781	.580
17. 私は、自分が無力だと思っています	.046	-.088	.087	.608	.453
27. 周りの人は、みんな私より立派な人です	.041	-.004	.052	.504	.256
28. 私は、敗北者だと思うことがよくあります	-.261	.186	.135	.405	.386
因子間の相関行列					
第I因子	1.000				
第II因子	0.477	1.000			
第III因子	-0.552	-0.281	1.000		
第IV因子	-0.698	-0.529	0.501	1.000	



$t=2.827, df=633, p<.01; t=6.520, df=420.74, p<.01$ ), 個人否定得点, 社会否定得点については女性の方が有意に得点が低かった(順に  $t=2.227, df=428.90, p<.05; t=2.458, df=467.11, p<.05$ ).

## 2. 理想自己の志向性と理想自己の方向への自己形成との関連

まず, 理想自己の志向性と過去から現在における理想自己の方向への自己形成の成果との関連を検討した。ピアソンの積率相関係数を求めた結果, 理想自己の志向性と成果評定得点の間には  $r=.293 (p<.01)$  で有意な正の相関がみとめられ, 成果数値との間にも  $r=.233 (p<.01)$  といずれも弱いながらも有意な正の相関が認められた。

続いて, 理想自己の志向性と現在から未来にかけての理想自己の方向への自己形成の予測との関連を検討した。ピアソンの積率相関係数を求めた結果, 理想自己の志向性と予測評定得点の間には  $r=.449 (p<.01)$  で, 理想自己の志向性と予測数値との間にも  $r=.481 (p<.01)$  で有意な正の相関が認められた。

以上の結果により, 理想自己の志向性と自己形成の程度とは正の関係にあること, また, その関係は未来における自己形成の予測の側面において特に顕著であることが示され, 仮説1'は支持された。

## 3. 理想自己の志向性と未来イメージとの関連

理想自己の志向性と未来イメージとの関連は,  $r=.317 (p<.01)$  と強くはないながらも有意な

正の関係にあることが明らかにされた。これにより, 仮説2は支持された。

## 4. 理想自己の志向性と自己評価との関連

理想自己の志向性と自己評価との関連についても同様にピアソンの積率相関係数を算出したところ, 各自己評価尺度との関係は Table 3の通りであった。個人基準否定的自己評価以外の3下位尺度とは1%水準で有意な関係がみられたが, 相関係数自体はさほど高いものではなかった。ただしこの関係の仕方については男女による違いがみられた。女性だけでみた場合, 理想自己志向得点と個人肯定得点, 社会肯定得点との相関は有意ではなく, 理想自己志向得点と個人否定得点との間に, 低いながらも有意な正の相関が示された。

次に, 理想自己と現実自己の不一致の意識化の程度の高い者を選出した。不一致の意識化の程度に対する回答の分布状況から, 「非常にあてはまる」に回答した者のみを対象に ( $n=150, 23.7%; M=53, F=97$ ), 理想自己の志向性と自己評価の各下位尺度との相関を検討したところ, Table 4の通りであった。それによると, 理想自己の志向性の高さは肯定性とはむしろ正の関係に, 否定性とは負の関係にあることが示され, 仮説3は支持されなかった。男女別にみた場合, この傾向は特に男性において顕著にみられるようであり, 女性においては理想自己志向得点と自己評価との有意な関係はみられなかった。だが, いずれにしても仮説3を支持する結果は得られなかった。

そこで, 理想自己の志向性の高い者約30%において, 理想自己と現実自己の不一致意識の高低に

Table 3 理想自己の志向性と自己評価の各下位尺度との関係<sup>a)</sup>

	自己評価尺度			
	個人的基準肯定	社会的基準肯定	個人的基準否定	社会的基準否定
理想自己の志向性	.133** (.219**/.071)	.141** (.288**/.022)	.043 (-.062/.134**)	-.184** (-.257**/-.131**)

(\*\* $p<.01$ )

<sup>a)</sup> 上段は全体における結果, 下段の括弧内については, 左が男子のみの結果, 右が女子のみの結果である。

よる自己評価の違いを検討した。理想自己の志向性の高い者における各自己評価尺度の平均値は28.9点 ( $SD=6.6$ ), 13.4点 ( $SD=4.7$ ), 25.7点 ( $SD=5.8$ 点), 12.7点 ( $SD=4.5$ ) であった。全体の平均値と比べて肯定的な方向へややずれているとも思われるが, 標準偏差は十分であった。理想自己と現実自己の不一致意識は, 日常において理想自己と現実自己の不一致をどの程度意識するのかという問いに対する答えから, 「全くない」~「ややある」と回答した者を低群 ( $n=77, 43.8%$ ), 「ある」と回答した者を中群 ( $n=189, 29.7%$ ), 「よくある」と回答した者を高群 ( $n=150, 23.5%$ ) とし, 3群による自己評価下位尺度の得点の比較を行った。その結果, Table 5の通りであった。その結果, 肯定性次元に関わる2つの自己評価については, 意識化の程度の高群は低群よりも得点が低く, 否定性次元に関わる2つの

自己評価については, 意識化の程度の高群は低群よりも得点が高かった。よって, 理想自己の志向性の高い者の中では, 意識化の程度の高い者ほど自己評価は否定的であることが示された。

続いて, 理想自己志向性と自己評価との関係に関する仮説4を検討すべく, 理想自己を実現していく手段と行動の有無による比較を行った。理想自己実現のための手段の所有について, 「はい」(もっている)と答えた者は274名 (43.1%), 「いいえ」(もっていない)と答えた者は362名 (56.9%) であった。その後, 「はい」と答えた者には実際に理想自己の実現に向けての行動の有無を, また, 「いいえ」と答えた者には, 理想自己の実現に向けての行動の希求の有無をそれぞれたずねていたが, それらの結果は, Table 6のようにまとめられた。

手段と行動の有無によって得られるこの4群それぞれについて, 理想自己の志向性と自己評価と

Table 4 理想自己と現実自己の不一致意識高群における理想自己の志向性と自己評価の各下位尺度との関係<sup>a)</sup>

	自己評価尺度			
	個人的基準肯定	社会的基準肯定	個人的基準否定	社会的基準否定
理想自己の志向性	.195* (.391**/.069)	.119 (.247/.026)	.040 (-.187/.091)	-.279** (-.433**/-.166)

(\*\* $p<.01, *p<.05$ )

<sup>a)</sup> 上段は全体における結果, 下段の括弧内については, 左が男子のみの結果, 右が女子のみの結果である。

Table 5 理想自己の志向性の高い者における理想自己と現実自己の不一致意識化の程度による自己評価得点の平均値の違い

自己評価の各下位尺度	各自己評価得点の平均値 <sup>a)</sup>			F値	群間差
	理想自己と現実自己の不一致意識化				
	高群	中群	低群		
個人基準肯定的自己評価	25.9 (7.2)	27.9 (6.6)	31.6 (5.0)	$F_{(2,172)}=14.476^{**}$	高, 中<低**
社会基準肯定的自己評価	11.9 (4.6)	12.6 (4.0)	14.9 (4.7)	$F_{(2,172)}=7.682^{**}$	高<低**, 高<中*
個人基準否定的自己評価	28.6 (5.1)	27.3 (4.7)	22.6 (5.4)	$F_{(2,172)}=24.801^{**}$	高, 中>低**
社会基準否定的自己評価	14.3 (4.9)	13.5 (4.8)	11.0 (3.4)	$F_{(2,172)}=10.481^{**}$	高>低**, 高>中*

(\*\* $p<.01, *p<.05$ )

<sup>a)</sup> 括弧内の数値は標準偏差である。

の関連を検討した。その結果、Table 7の通りであった。全体としてどの群においても両者の関連は弱く、有意な関係が認められたのは、理想自己の志向性と肯定的自己評価との間における正の関係、および、否定的自己評価との間における負の関係のみであった。これにより、仮説4は支持さ

れなかった。

これをふまえ、先ほどと同様、理想自己の志向性の高い者30%のみを抽出し、手段と行動の有無による自己評価得点の違いを一要因分散分析によって検討した。その結果はTable 8の通りであり、ここでも有意な差は認められなかった。

Table 6 理想自己実現に対する手段および行動の有無

理想自己実現の手段 (プランの有無)		行動/行動希求の有無	
はい (手段をもっている)	274 (43.1%) <sup>a)</sup>	はい (行動している)	202 (32.4%)
		いいえ (行動していない)	64 (10.3%)
いいえ (手段をもっていない)	362 (56.9%) <sup>a)</sup>	はい (行動したい)	304 (48.8%)
		いいえ (行動したいと思わない)	53 (8.5%)

<sup>a)</sup> 右の欄の合計と数値が合わないのは、行動/行動希求に対する回答の欠損があったためである。

Table 7 実現手段と行動の有無別にみた理想自己の志向性と自己評価の各下位尺度との関係

理想自己の志向性	自己評価尺度			
	個人基準肯定	社会基準肯定	個人基準否定	社会基準否定
手段あり行動あり群 (n=198~201)	.177*	.155*	-.076	-.198*
手段あり行動なし群 (n=62~64)	.146	.165	-.101	-.176
手段なし行動希求あり群 (n=296~304)	.099	.140*	.040	-.150**
手段なし行動希求なし群 (n=52~53)	.104	-.085	.095	-.150

(\*\*p < .01, \*p < .05)

Table 8 理想自己の志向性の高い者における理想自己実現のための手段と行動の有無による自己評価得点の平均値の違い

自己評価の各下位尺度	各自己評価得点の平均値 <sup>a)</sup>				F 値 <sup>b)</sup>
	手段あり		手段なし		
	行動あり (n=106)	行動なし (n=16)	行動希求あり (n=47)	行動希求なし (n=3)	
個人基準肯定的自己評価	29.6 (6.2)	27.3 (7.4)	27.9 (6.7)	35.3 (4.5)	F(3,167) = 2.079
社会基準肯定的自己評価	13.5 (4.4)	13.3 (4.7)	13.1 (5.4)	12.0 (4.4)	F(3,168) = 0.173
個人基準否定的自己評価	25.5 (6.0)	25.9 (6.7)	26.0 (5.3)	22.3 (5.8)	F(3,168) = 0.407
社会的基準否定的自己評価	12.5 (4.4)	13.1 (4.8)	13.1 (4.7)	10.3 (5.1)	F(3,168) = 0.496

<sup>a)</sup> 括弧内の数値は標準偏差である。

<sup>b)</sup> いずれも p > .10であり有意ではなかった。

5. 理想自己の志向性の高さは：理想自己実現の手段・行動との関連から

これまでの検討により、理想自己を志向することについて、それは自己形成の感覚をもたらすという肯定的側面があることが示された。また、現在の適応を阻害するような否定的側面については積極的に支持されないことが明らかにされてきた。これは、理想自己が個人の自己形成を促すという側面を強く支持する結果であるが、この結果は、理想自己志向の高さが、単なる意識のあり方にとどまらず、実際的な手段や行動の獲得も伴っているためではないかと予想させる。

そこで、理想自己の志向性の上位30%の者(高群)、下位30%の者(低群)、その間の者(中群)の3群について、手段や行動の獲得の様相の違いを検討した。その結果、Figure 2の通りであった。理想自己の志向性の高い者ほど手段と行動の伴っている者が多く、理想自己の志向性の低い者では、手段を有しておらず行動したいとも思っていない者の割合が他の群に比べて増加していた。

ここから、理想自己の志向性と理想自己実現のための手段や行動の獲得との相互関係性が示唆された。すなわち、理想自己を志向することが手段や行動の獲得を促進したり、あるいは、手段や行動が伴っているということによってより志向性が高まったりするのではないかと考えられた。本研究で得られた理想自己の志向性における肯定的な側面は、理想自己の志向性がこのような個人のあ

り方を意味していることによると解釈された。

考 察

本研究により、理想自己を志向するということ、自らがその方向へと自己形成をしていけるであろうという予測とが正の関係にあるということが明らかにされた。青年期における否定性や理想主義には、自らの可能性をあきらめきれない心性が反映されていると指摘されてきたが(星野, 1978; 北村, 1965)、理想自己の志向性と未来における自己形成の予測との正の関連を示した本研究の結果は、まさにそれらの指摘を支持するものであったといえる。すなわち、自らが今後理想自己の方向へと近づいていけるであろうと予測しているが故に、理想自己の志向性が高くなるというものであり、理想自己を志向するということは、今後の自己に対する期待や可能性のあらわれとしてとらえてよいであろうとするものである。

ただし、本研究で因果ではなく相関分析にとどめたのは、理想自己の志向性が高いが故に、予測が肯定的になるという側面もあるのではないかと考えられたからである。理想自己の志向性という場合、「もっと成長していきたい」というような漠然とした態度とは異なり、そこにはめざす自己表象が伴ってくる。その意味では、たとえそれが抽象的なものであろうと対象化された志向性であるということが出来る。人間の行動には対象が必要であることを白井(2001)は指摘するが、理想

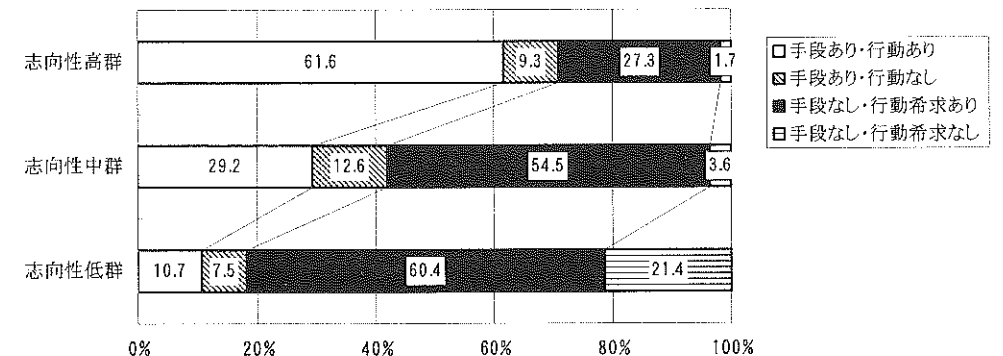


Figure 2 理想自己の志向性による理想自己実現の手段および行動獲得の様相



自己の志向性という場合、対象の存在という点は満たされた条件にある。理想自己が行動の指針となるもの (e.g., 遠藤, 1991; 水間, 1998a), 理想自己がめざすべき対象として存在しうからであろう。このように、理想自己の志向性の高さは何らかの対象に向かっていこうとする態度の一つとしてとらえることができる。それに向かっているという現在の自己のあり方が、未来の自己を予測する上で肯定的に影響を与えているところもあるのではないかと考えられるのである。本研究で得られた実際の自己形成に対する予測と理想自己の志向性との正の関連は、そのような志向性と予測との相互作用的な関係を反映していると考えられた。

また、同時に理想自己の志向性は未来イメージの肯定性とも正の関係にあった。これは、本研究において個人が対象化した未来は、個人の自己に深く関わった形で成立している未来であることをさす。まず、理想自己の志向性は未来における自己形成についての予測と正の関係にあった。そしてその理想自己の志向性は未来に対する肯定的なイメージと正の関係にあった。何をもち「未来」とするかは、それがいかなる文脈において対象化されるかによって異なってくると考えられるが、自分にとっての未来という場合、普通、それは自己との関わりを中心とした構造によって構成されると考えられる。それゆえ、理想自己の志向性というまだ実現していない自己を対象とした意識のあり方と未来イメージとの関連は至極納得のいくものである。先の自己形成の予測と理想自己の志向性の間における正の関係をふまえるとなおさらである。

さらに、理想自己の志向性が自己のあり方を問題にしているものではあるが、それは単に自己のあり方のみでなく、個人の心理的未来全体の肯定性と関連するということに焦点を当てると、この関連は理想自己の志向性の肯定的意味合いに広がりをもたせるものであるととることができる。水間・溝上 (1999) において、未来に対する事象が個人の意識において重きを占めるのは否定

的文脈においてであることが多いと指摘されていることや、白井 (1995) においてポジティブな現在志向が増加していると指摘されていることをふまえると、未来に対する意識的広がりをもつことが肯定的とは限らない。しかしながら、理想自己という表象を媒介にすることによって、より豊かな広がりをもつ肯定的な心理的未来を得ることも可能になるのではないかと示唆される。

過去から現在までどの程度自己形成がなされたかという成果についての評価も、理想自己の志向性と有意な正の関係にあった。それは非常に弱いものであったが、理想自己の志向性が高い者の方が成果をより多く感じている傾向があるということは可能である。少なくとも、理想自己の志向性は過去の成果に対して否定的な関係をもつものでは決してないことは明らかであると主張することができるであろう。本研究では問題部分において述べたように、理想自己の志向性の高さゆえに生じてくる弊害も十分考慮に入れていたのであるが、その否定的関係はみとめられなかった。過去から現在における自己形成を高く感じることができていけば、それは自負心となり、志向性を持続していくことができる。逆に志向しているのに成果が上がらない場合は、むしろその志向性自体が低下するとも考えられる。従来教育など何らかの課題場面で指摘されてきた事象 (cf. Dweck, 1975) が、理想自己という他から与えられた課題ではない対象に対する場合でも同様にみとめられる可能性もある。そして、先に述べたような、理想自己を志向しているということによって、それに関連した過去事象も肯定的に再構成されているという側面もあると考えられる。これまで、過去の事象の再構成については現在の自己評価や自己概念のあり方が特に関連することが指摘されているが (e.g., Ross, 1989), 本研究における結果からは、自己の静的な状態のみならず、志向性のような動的な側面も、過去の再構成に影響をおよぼすものの一つなのではないかと考えられた。

以上のように、理想自己の志向性は、理想自己の方向への自己形成と正の関連をもつという点

で、肯定的意味を指摘することができる。本研究で用いた自己形成の指標は、個人の主観的な感情や認知によるものであり、実際の自己形成がなされたかどうかについては疑問が呈されるかもしれない。しかしながら、そのような個人の認知や自己概念の捉え方が、結局は自己を形成していく経験を切り取る枠組みとなり、また経験世界において行動する際の基盤となる (e.g., Snygg & Combs, 1959)。そう考えると、主観的認知であってもそれに基づいた経験が蓄積されることによって、結果的に真実となることも十分ありうる。自己形成における個人の主体性の問題を考える際には、そのような、いかなる認知的枠組みをもっているのかということは非常に重要となるのである (水間, 2002b)。

また、本研究では理想自己の否定的意味も併せて考えていくために、理想自己の志向性と自己評価との関連性についても検討を行った。理想自己の志向性は、肯定的自己評価との間に有意な正の、否定的自己評価との間に有意な負の関係がみとめられたが、その相関係数の値は低く、散布図もまばらであったため、理想自己の志向性と自己評価との関連はそこまで強くないと考えられた。

ただし、女性に関しては個人基準否定的自己評価が理想自己志向性と低いながらも有意な正の相関にあった。男性の場合はむしろ理想自己の志向性は肯定性と有意な正の相関を示していたのに対し、これは対照的な結果であった。男女差は、そもそも自己評価の得点についてみられ、女性は男性よりも肯定性に関する得点が低く、否定性に関する得点が高かった。自己への肯定性について、女性の方が男性よりも低いという結果を示す研究はこれまでもしばしばみられてきた (e.g., 加藤, 1977; 沢崎, 1994)。だが本研究の結果と照らし合わせると、女性の自己に対する否定性は、理想自己を求める心性とのつながりをもつ、単なる否定性にとどまらない意味をもつものであることが示唆される。あるいは、女性の場合、本研究の問題部分で述べたような、理想自己を志向するが故にもたらされている自己の否定性の程度が、男

性よりも高いともいえる。この男女差については内容との照合もおこなった詳しい検討が今後必要であろう。これは今後の課題として後述する。

そして、日常においてどの程度理想自己と現実自己の不一致についての意識化がなされているのかを考慮した結果、理想自己の志向性が高い者においては、理想自己と現実自己の不一致に対する意識が高い者よりも自己評価が否定的であるということが明らかにされた。本研究で扱っているのは、個人にとっての重要性のある程度兼ね備えた理想自己であると考えられる。その不一致は個人に否定的感情を喚起させるため (Higgins, 1987; 遠藤, 1992), それを頻繁に意識化することは自己評価を否定的なものにしてしまうのであろう。理想自己の志向性が高く、また日常的に感じている理想自己と現実自己の不一致に対する意識も高い場合は、理想自己の志向性の高さは否定的感情に直面する機会を多くするという点で、現在の自己評価の文脈においては否定的な意味をもつと解釈される。

これは、理想自己の志向性の高い者における理想自己と現実自己の不一致意識化高群と低群における自己評価の平均値と、全体での自己評価の平均値とを比較してみると、むしろ理想自己の志向性が高く不一致の意識化が低い者は自己評価が非常に肯定的であるということを示す結果ともとらえられる。否定的自己に対し、そこからの意識回避が図れることは適応においては非常に重要なこととされるが (Greenberg & Pyszczynski, 1986), 同時に、我々が故意に自己から意識を反らそうとすることは、そう容易ではないといわれている (cf. Baumeister, 1998)。理想自己を強く志向しながらも、理想自己と現実自己の不一致を頻繁に意識するわけではないというあり方は、自己対象化をうまくコントロールできていることを示しているのかもしれない。理想自己を、それと不一致の状態にある自己を否定するためのものではなく、今後自己が形成されていく方向として、個人の意識に位置づけることができているのであれ

ば、現在の自己評価も否定性を帯びることは少ないであろう。むしろ、向上心に裏打ちされたより肯定的なものになるとも考えられる。ここでは理想自己の志向性の否定的意味を十分にとらえることはできなかったが、現在の適応も高いままで理想自己の志向性が高められる場合とはいかなる場合であるかが示されたといえる。

理想自己実現のための手段と行動とを考慮した場合の理想自己の志向性と自己評価との関連については、仮説を支持する結果は得られなかったが、理想自己実現のための手段と行動とを考慮することにより、理想自己の志向性の高さの意味を理解する新たな知見が得られた。理想自己の実現の手段をもち、かつ行動をしている者は、理想自己の志向性の高い者においては半数以上(61.6%)もみられ、理想自己の志向性の高さは、手段や行動の獲得をも意味している可能性が示されたのである。尾崎(2001)の将来展望に関する研究では、実際の行動手段をもっておりしかも実行しているという者は全体では35.1%にとどまっている。これをふまえると、61.6%というのはかなり高い数値といえる。この結果から、なぜ理想自己の志向性と自己評価の肯定性とは関連するのか、あるいは否定性と関連しないのか、という点について、以下のように解釈していくことができるであろう。すなわち、理想自己の志向性とは単にそうなりたいという気持ちの強さのみでなく、理想自己実現のための手段や行動が伴っているということも反映しているものである。それは、これまで指摘されてきたような理想自己の志向性による否定性を指摘する文脈とは一線を画するものとなる。そのために、理想自己の志向性について否定的意味がみられなかったのではないかとということである。先に述べた自己形成の程度に対する肯定的な評価と理想自己の志向性との正の関係も、ここからは、理想自己の志向性に伴う認知バイアスによってのみでなく、志向性が高くなるにつれて手段や行動が伴うという側面も含めて成り立っている関係なのであると再解釈された。

視点を変えると、本研究で理想自己の志向性と

自己評価とがほとんど関係がないという形で示されたことから、理想自己の意味というものが自己評価のような軸とは別の次元において問われるべきものであるということが明らかにされたともいえる。たとえば、六宗(2001)は、自己と生き方に関する調査体験についてのレポート報告において、非常に否定的な自己感情と大きな不安を抱きながら調査に取り組んだ過程を切々と語っている。これは調査という一種の課題を与えられた状況下での話ではあるものの、彼の報告を読めばその課題が自己の課題に直面せざるを得ないものであったことはすぐわかる。否定的な自己に直面しながらも一歩前へ進み、さらにそこで再び否定的な自己に出会う、それを繰り返しながら、それでも着実に向かうべきところへ進んでいく姿がそのレポートからは読み取れる。彼の現実自己が理想自己と一致しないものであることは冒頭の記述からも明らかであるし、自己が否定的様相を帯びていることはレポートの端々に書かれているのだが、そのような状態の中でも進み続ける彼の姿の意味するところを、自己評価という軸からのみ考えてしまうと、説明されない部分が多くなってしまいうように思われてならない。やはり、その意味は自己形成のプロセスの中でとらえられるべきであろう。

以上の検討を通して、本研究で明らかにされたことは、以下の通りであった。すなわち、理想自己の志向性は、それが自らの自己形成を個人が肯定的にとらえていくことと正の関連をもつという点で、肯定的意味を有しているということであった。そして、それはおそらく、理想自己の志向性の高さが単にそうなりたいという気持ちの強さを示しているのではなく、手段や行動を伴うことも意味しているためであろうということであった。

#### 今後の課題

本研究で、理想自己を志向することの肯定的意味が指摘されたことにより、今後理想自己に関する議論を自己形成の文脈において展開していくことができるであろう。自己形成における主体性を

考えていく上で、理想自己の問題は、その設定から実現に至るまで非常に重要なテーマとなるであろうと筆者は考えている。

そこで、今後の課題として大きく2つをあげたい。

一つは、その志向性を支える要因の検討である。理想自己志向性が個人の自己形成において肯定的な役割を果たすのであれば、当然、いかなる場合にその志向性が高く保たれるのかという議論が生じる。人間に自己実現の欲求(Maslow, 1954)を仮定するにせよ、それがいかに発揮されるのかには個人差があることは本研究をみても明らかである。この点について、筆者は個人の理想自己との関係を中心に考えていきたいと思っている。自己を対象化し、自ら理想自己を求めるというプロセスには、当然、いかなる個人がそれを求めているのかという議論が重視されて然るべきである。しかしながら、個人差について個人差で説明する議論は、あまり有効な説明をなさないように思われる。いかなる個人がいかなる理想自己を設定し、いかに志向しているのか、という問いに立って、いかなる場合に理想自己志向性が高められるのかを明らかにしていく必要がある。

そのような、対象化された理想自己との関係における議論とは別に、そもそもの理想自己設定の問題も十分に議論して行かねばならないと考えている。これがもう一つの今後の大きな課題である。理想自己はそもそも様々な文脈における社会的な価値観や規範をベースとしつつ、個人によって取捨選択され、内在化されたものである(水間, 1988)。自己をとりまく社会と、自己との間に、理想自己は存在するともいえる。その意味では理想自己は、社会的な要因を射程に入れながら検討が非常に重視される問題である。本研究でわずかに指摘された男女差の問題も、単なる性別で区分した議論は批判されがちではあるが、社会における性役割意識や個人の根深いところにある性別観などが旧態のものからぬぐい去れないという現状において、我々が存在しているということは自覚されるべきであろう(国眼・松下, 2001)。こ

れまでしばしば自己研究で指摘されてきた男女差の問題を糸口に、理想自己を通してそれが成立する社会的背景や実現されていく環境などを考慮しながら検討をすすめていきたいと考えている。

#### 引用文献

- Achenbach, T., & Zigler, E. 1963 Social competence and self-image disparity in psychiatric and nonpsychiatric patients. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 197-205.
- 新井素子 2001 理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響. *心理学研究*, 72, 315-321.
- Baumeister, R.F. 1998 The self. In D.T. Gilbert, S.T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology*, 4<sup>th</sup> edition, pp.680-740. Boston, MA: The McGraw-Hill.
- Burns, D.D. 1980 The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today*, 34-52.
- Buss, D.M. & Scheier, M.F. 1976 Self-consciousness, self-awareness, and self-attribution. *Journal of Research in Personality*, 10, 463-468.
- Carver, C.S. & Scheier, M.F. 1990 Principles of self-regulation: Action and emotion. In E.T. Higgins & R.M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition; Foundations of social behavior*, vol.2, pp.3-52. New York: The Guilford Press.
- Duval, S., Duval, V.H., & Neeley, R. 1979 Self-focus, felt responsibility, and helping behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1769-1778.
- Dweck, C.S. 1975 The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 674-684.
- Emmons, R.A. 1992 Abstract versus concrete goals: Personal striving level, physical illness, and psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 292-300.

- 遠藤由美 1991 理想自己に関する最近の研究動向—自己概念と適応との関連で— 上越教育大学研究紀要, 10, 19-36.
- 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, 40, 157-163.
- Frankl, V.E. 1946 *Aerztliche Seelsorge*. Verlag: Franz Deuticke, Wien. (霜山徳爾訳 1957/1985 死と愛—実存分析入門(新装)—みすず書房)
- Gibbons, R.X., Smith, T.W., Ingram, R.E., Pearce, K., Brehm, S.S., & Schroeder, D.J. 1985 Self-awareness and self-confrontation: Effects of self-focused attention on members of a clinical population. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 662-675.
- Greenberg, J. & Pyszczynski, T. 1986 Persistent high self-focus after failure and low self-focus after success; The depressive self-focusing style. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1039-1044.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Burling, J., & Tibbs, K. 1992 Depression, self-focused attention, and the self-serving bias. *Personality and Individual Differences*, 13, 959-965.
- Higgins, E.T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- Horney, K. 1945 *Our inner conflicts: A constructive theory of neurosis*. New York: W.W. Norton & Company (我妻 洋・佐々木 譲訳 1981 ホーナイ全集5心の葛藤 誠信書房)
- 星野 命 1978 青年であるがゆえのなやみ!?—「悩まないのは青年でない」か— 青年心理, 9, 33-42.
- 稲垣智則 2001 抑うつと対人不安における、自己嫌悪感の中心的役割 日本心理学会第65回大会発表論文集, 973.
- 井上光一 1999 自己受容における向上心とあきらめ 京都大学教育学部紀要, 45, 406-418.
- 梶田 毅一 1988 自己意識の心理学〔第二版〕 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ, 14, 東京大学出版会
- 桂 広介・加藤隆勝 1959 青年の自己意識と社会意識に関する一研究 東京教育大学教育相談所紀要, 1, 18-29. (加藤, 1977より引用)
- Katz, J. & Farrow, S. 2000 Discrepant self-views and young women's sexual and emotional adjustment. *Sex Roles*, 42, 781-805.
- Katz, P. & Zigler, E. 1967 Self-image disparity: A developmental approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 186-195.
- 北村晴朗 1955 自我意識 安倍三郎・北村晴朗・丸井澄子・田中康久・竹内照宗・佐藤壽郎 新青年心理学, (pp.42-57), 協同出版
- 北村晴朗 1962 自我の心理 誠信書房
- 国眼眞理子・松下美知子 2001 進路の選択と決定に関する研究—ジェンダーの視点から— 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 203.
- Maslow, A.H. 1954 *Motivation and personality* (Second edition). New York: Harper & Row. (小口忠彦訳 1987 人間性の心理学 産能大学出版部)
- 溝上慎一 1997 自己評価の規定要因とSELF-ESTEEMとの関係—個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係— 教育心理学研究, 45, 62-70.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論—実証的心理学的パラダイム— 金子書房
- 溝上慎一・水間玲子 1997 「自我—自己」からみた青年心理学研究—意義と問題点, 今後の課題— 京都大学高等教育研究, 3, 25-45.
- 水間玲子 1998 自己研究における「価値」—その位置づけと検討意義について— 京都大学教育学部紀要, 44, 192-204.
- 水間玲子 2001 自己形成意識の構造について

- 否定的感情と理想自己の役割から— 京都大学大学院教育学研究科博士論文〔未公開〕
- 水間玲子 2002a 「理想自己」における理想的意味合いと義務的意味合い 日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 63.
- 水間玲子 2002b 自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題—個人の主体性の問題— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48. (印刷中)
- 水間玲子 投稿中 否定的自己の文脈における自己形成意識
- 水間玲子・溝上慎一 1999 自己対象化に伴う時間的環境—自己評価規定要因記述における時間軸の有無から— 日本心理学会第63回大会発表論文集, 909.
- 森田正馬 1995 神経衰弱と強迫観念の根治法—ノイローゼ克服への必読の原点〔新版〕— 白揚社(初刊1924, 実業之日本社)
- 六宗 渉 2001 20人の大学生と対話して 溝上慎一編 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—, (pp.15-18), ナカニシヤ出版
- 尾崎仁美 2001 大学生の将来の見通しと適応との関連 溝上慎一編 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—, (pp.167-196), ナカニシヤ出版.
- Pyszczynski, T., Holt, K., & Greenberg, J. 1987 Depression, self-focused attention, and expectancies for positive and negative future life events for self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 994-1001.
- Pyszczynski, T., Hamilton, J.C., Herring, F.H., & Greenberg, J. 1989 Depression, self-focused attention, and the negative memory bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 351-357.
- Rogers, C.R. 1951 *Client-centered therapy: Its current practice, implications and theory*. Boston: Houghton Mifflin.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- Ross, M. 1989 Relation of implicit theories to the construction of personal histories. *Psychological Review*, 96, 341-357
- 坂本真士 1997 自己注目と抑うつの社会心理学 東京大学出版会
- 沢崎達夫 1994 自己受容に関する研究(2)—男女大学生における自己受容の様相を中心として— カウンセリング研究, 27, 46-52.
- 白井利明 1995 現代における“ポジティブな現在志向”の意義と検討課題 大阪教育大学教育研究所報, 30, 61-68.
- 白井利明 2001 〈希望〉の心理学—時間的展望をどうもつか— 講談社現代新書
- Snygg, D. & Combs, A.W. 1949 *Individual behavior: A new frame of reference for psychology*. New York: Harper & Brothers.
- 都筑 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- Zimmer, H. 1954 Self-acceptance and its relation to conflict. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 447-449.

## 付 記

本論文作成に当たり、京都大学大学院教育学研究科教授子安増生先生、同助教授吉川左紀子先生、同助教授楠見孝先生に御指導、御示唆を賜りました。厚く感謝申し上げます。

(2001年12月4日受稿, 2002年5月27日受理)

## 水間論文へのコメント

高橋 紀子<sup>1</sup>

Comments on Mizuma's Article

Noriko TAKAHASHI<sup>1</sup>

### はじめに

第14号掲載の水間論文「理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について—」を読ませていただいた。

この意見論文では、水間論文において「理想自己を志向する」という表現が示す事象をその方法論を中心に理解した上で、いくつかの問題点を指摘する。そして次に、青年期理解の視点から、青年における理想自己を志向することの意味について考えることとする。

### 1. 理想自己を志向する、とは

「理想自己を志向する」とはどのようなことか。読み進めるとそれは理想自己の実現を求めようとすることと理解できる。水間論文では、このキーワードともいえる表現の操作的定義は無く、他の表現と並行して使用される。よって、どこまでが「理想自己を志向する」ということが前提としている事柄であり、どこからが検討されている側面(肯定性、否定性)であるのか、すっきりしない印象もある。扱われる事象を明らかにされた上でその意味を検討されたほうが、よりわかりやす

く、結果も説得力を増すだろう。

ここでは、「理想自己を志向する」ことに関して水間論文の方法論からの理解をもとに、疑問点をあげることとする。

#### (1) “理想自己の志向性を問う項目”から

この質問項目は「理想自己の実現を目指す意識を表す項目を中心に」作成された項目とある。項目には「実現させるために」「実現できるか」といった表現がみられ、その理想自己は現時点で実現されていないものというニュアンスが強い。

これにより志向性の低い群となった中には、実現への意欲が低い群だけでなく、現時点である程度実現できている為に、敢えて意欲的になる必要のない群が混在するだろう。両者では、理想自己を志向することへの否定的意味合いや未来イメージの肯定性は異なると推測される。

また、理想自己に欠点や短所といった現実自己を否定する性質が強い場合、実現を求める一方で、実現させることが現実自己の否定に直結することから、実現を望まない気持ちも共存し、アンビバレントな心性が生じる可能性もある。

志向性の高低を直線的に捉えようと、これらの心性は捉えられない。例えば、志向する程度と、志向しない程度を違う軸として二次元で捉えるならば、理想自己の志向性をより立体的に把握できるかもしれない。

<sup>1</sup> 九州大学大学院人間環境学府 (Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University)

(2) “理想自己の方向への自己形成の程度” から理想自己への変化の過程と予想について、水間氏は理想自己を10とした折れ線グラフでの記述を求めた。水間論文の面白さのひとつは、こうした方法論の独創性にある。理想自己の方向への自己形成の程度を過去-現在-未来の折れ線グラフで記述させる測定法は、従来の5件法等に比べ格段に自己形成の過程を想起しやすい。

既存の方法論を見直し、より実感に近い形で測定できるよう工夫されたこの論文は、ややもすると理屈が一人歩きしがちな自己のテーマを、実態の伴った目線から再検討する機会を与えてくれる。

#### 理想自己を固定的に扱う弊害

しかし、この方法では理想自己は固定的なものとして扱われる。調査対象となった青年期の場合、理想自己の質的意味自体も変化の過程にあるとされる。伊藤 (1993) は、青年期から成人期にかけての発達を、社会的理想像 (社会的期待や慣習を取り入れそれへの適応を方向づける理想像) と、個人的理想像 (自律的で自我親和的な内容を持ち個性化を方向付ける理想像) の分化と統合の編成過程の連鎖から論じている。親や社会から求められるものであった期待や規範から生まれる理想自己と、より自分らしくあろうとして思い描く理想自己では、その質的な意味は異なる。青年期において、これらの理想自己が種々の役割を持って内在化される過程を考慮すると、理想自己を固定させ折れ線グラフを記述させる方法には青年期独自の自己の変化プロセスに適合しない部分もあると思う。

#### 現実自己と理想自己の相互の力動

また青年期に限らず、理想自己と現実自己の差異の変動には、現実自己が理想自己に近づくだけでなく、理想自己が現実自己に近づく過程もある。井上 (1999) は、それを“向上心”と“あきらめ”と捉え、この双方が働くことでより安定的な自己受容ができることを明かにした。水間氏自

身も「志向しているのに成果が上がらない場合は、むしろその志向性自体が低下することも考えられる」と述べているように、実現を求める程度を低下させることもあるだろう。水間論文の測定方法ではこれらの理想自己と現実自己の力動を捉えることはできない。自己の構造や機能全体を一度に捉えることは難しく、必ずしも必要ではないかもしれない。しかし理想自己を志向するということの持つ意味を多面的に理解する上で、自己の双方の力動を扱うことは、より有効な知見を得る手立てとなるのではないか。

## 2. 青年期理解の視点から

水間論文の調査対象は全て大学生である。よって、得られた結果は“青年期における”理想自己を志向することの意味と読み取ることもできるだろう。水間論文で得られた知見は、青年の自己との関わり方を理解する糸口としても貴重な示唆を与えるものである。

そこでここでは、水間論文で得られた結果を、青年期の特徴と合わせて考えていきたい。

### (1) 自己像の両極化

今回、自己を志向することと自己評価には大きな関連はみられなかった。水間氏はその解釈として、理想自己の志向性には実現のための手段や行動が伴う点をあげている。この結果はその他に、自己像が両極化しやすい青年のあり方という視点から検討できないだろうか。

自己への意識の高さは、否定的自己を認識させる一方で、過度に肯定的な自己評価を招く場合もある。丹野 (1987) は青年期の精神障害を述べる中で、彼等の自己評価が否定的自己像に彩られやすい一方で、万能的自己像がみられることを指摘する。そしてこの万能的自己像は、登校拒否や家庭内暴力、薬物乱用といった青年期の社会不適応問題と関連すると述べている。理想自己の志向性と自己評価には、この両極の自己評価が混在し、結果が相殺された可能性はないだろうか。

### (2) 青年の理想自己との関わりの変化

また、理想自己の志向性が高く不一致の意識化が低い者は、自己評価が非常に肯定的であることが明らかになった。水間氏はこれを「自己対象化をうまくコントロールできていることを示しているのかもしれない」としたが、果たしてそうだろうか。

臨床場面からは、自分の抱えている悩みに巻き込まれてしまう (福盛・村山, 1994) 傾向や、自分が何を悩んでいるのかを確認する作業だけを目的に米談する学生 (保坂, 1996) 等、自己との適切な距離を持つことを困難を感じている青年の傾向や、自己を対象化する場としての学生相談の役割の重要性が指摘されている。これらの指摘を踏まえると、志向性を持ちながら不一致を意識しないとは、自己対象化しているというより、「意欲はあるが今は取り組もうとしていない」姿勢と理解するほうが、しっくりすると思う。

その態度は、下山 (1992) のモラトリアム下位分類のひとつ「延期」のあり方と共通する。「延期」群とは、大学期を社会的責任の免除された時期とみなし、自由に遊びを楽しみつつも、必要な時になれば社会参加を行う特徴を持つ。

自己に関しても、理想自己の実現を求めながら、普段は意識せず先送りにする関わりが、適応的なあり方のひとつとなっているのかもしれない。

理想自己を志向することの意味は、発達段階によって異なる可能性もあるだろう。発達の視点から

らの検討も、今後の研究の方向性の一つとして考えてみられても面白いのではないかと思う。

## 引用文献

- 保坂一己 1996 “サマ” にならない心理支援学生相談室の利用の仕方は学生しだい. ころの科学, 69, 43-47.
- 福盛英明・村山正治 1994 青年期のメンタルヘルスアプローチ・フォーカシングにおける「間」のほどよさと成功との関係について—「間」を測定する尺度の作成の試み—. 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 39, 109-114.
- 井上光一 1999 自己受容における向上心とあきらめ. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45, 406-418.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 64, 115-122.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—. 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 丹野義彦 1987 非社会性の障害とその治療 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲 (編) 自己形成の心理学—青年期のアイデンティティとその障害—. 川島書店, 71-105.
- (2002年5月17日受稿, 2003年6月9日受理)



## 水間論文「理想自己を志向することの意味」から思うこと

伊藤美奈子<sup>1</sup>

Comments on Mizuma's Article "The Meaning of Intention Toward Ideal Self"

Minako ITO<sup>1</sup>

本論文は、理想自己の志向性と自己形成との関連を明らかにすることを目的の一つとする。かつ、自己形成については、過去から現在までの成果と現在から未来に向けての予測という2側面から注目すると同時に、未来イメージとの関連にも注目している。さらに、具体的な手段や行動の有無との関連から、理想自己の志向性が具体的な個人のあり方とも相互作用を持つのではないという観点からも分析が加えられている。

これまで、青年期の自己意識や自己形成に関する論文は数多く輩出されてきた（高田，1997ほか参照）。青年期は、自分自身に気づき、それを崩し、また築いていくという作業を繰り返し、その作業を通して、過去の自分と未来の自分をつなぐ歴史の中に自らを意味づけていく。本研究は、自己形成の一面を理想自己への志向性という切り口から検討したものである。

### 本研究の方法について

本研究の特徴の一つは、理想自己そのものを研究者から提示するのではなく、まず青年自身に語らせるという点にある。その上で、それについての程度志向しているかを尺度評定するよう求めている。さらに、その理想自己と現実自己のずれ

や、理想自己実現のための手段や行動の有無について問うという形で質問紙が展開されることになる。質問紙を前にした青年は、あたかも質問紙との間で構造化された面接を受けるような形で、自己分析を進めるのではないだろうか。理想自己に向けて自己形成をしていくという力動的な側面をとらえようとする場合、一つの尺度で切り取るのは限界がある。それを補うために、くいくつかの質問紙を組み合わせる＜面接法など質的なデータを加える＞などの方法がある。本論文ではそれを質問紙の中で一つずつ質問を積み上げることで“対話”の形として抽出しようという意図がうかがえる。分析においては、理想自己やその実現のための手段や行動の中身を具体的に検討することを目的とせず、あくまで大量データとして処理されているが、数値データの分析を積み重ねることで、より深みのある考察が可能となっている。＜理想自己の中身によって、どんな特徴が見出せるのだろう＞＜理想自己の内容による分類やデータ全体を生かした分析の工夫ができればどんな展開がありうるだろう＞という興味がわいた。

### 理想自己と現実自己の差異と自己評価との関連について

考察の後半では、「理想自己の志向性と自己評価とがほとんど関係がないという形で示されたこ

とからは、理想自己の意味というものが自己評価のような軸とは別の次元において問われるべきものであるということが明らかにされた」（36頁）という記述がある。自己評価と理想自己の志向性とがダイレクトに関連するのではないことに注目している。さらに、理想自己の志向性がポジティブな意味を持つのかネガティブな意味を持つのかという二分法ではなく、両方ありうるのであり、それに作用する要因が他に存在することを示唆した結果である。この点に、青年期心性に対するより深い探求の姿勢がうかがえる。

しかし、本論文でも言及されている通り、結果（30～31頁）では弱いながらも関連が見出されており、そこには性による違いも散見される。まず、男女に共通する結果としては、社会的基準による自己否定得点が、理想自己の志向性とは負の関係を有するという点である。男女いずれにおいても、青年期には、人との関係の中での自己否定が、未来の目標に志向していく意欲の低さと関連する。「人との関係の中で傷つきやすい」青年像と重なる結果である。人との関わりの中での自己否定は、現実の自己を否定するだけでなく未来の自己をも閉ざすという点で、青年に大きな影響を与えるものであることがうかがえる。

男性は、自己に対する肯定的な評価は（個人的基準・社会的基準にかかわらず）理想自己の志向性と関連を持つ。つまり、男性については、自己の内面に対する自信や受容も、人との比較の中で表面化しやすい社会的な自己に対する評価も、ともに理想自己に近づこうという意欲につながりうる。この結果は、理想自己の志向性が現在を強化する方向で機能する可能性を持つと解釈されよう。

他方、女性は、個人的基準否定が理想自己の志向性と正の関連を示した。つまり、女性においては、自己の否定面に注目することが理想を志向する前向きな意欲に結びつくことがある（本論文では“自己に対する否定性は、理想自己を求める心性とのつながりをもつ”）が、これは、現実自己が理想と大きく乖離していない場合に限る。これ

に対し、男性においては理想自己の志向性とはほとんど関連を見出せなかった。ここでいう個人的基準否定の項目例に注目すると、「今のままの自分ではいけない」「今の私ははがゆくて仕方ありません」のように、現在の自己を変えたいけれども思うようにいかないがゆえの「もがき」や「自己嫌悪」に近い。女性にとっては、社会的基準による評価と自分自身の基準による評価とが別次元の（反対の意味を持つ）ものであり、その意味でも女性にとっての2つの基準は二重背反的な「二重規範」の様相を呈する可能性を持つことがわかる。理想自己の中身そのものにも性差が見られるのかについて質的分析はなされていないが、興味深い結果である。ただし、筆者自身も指摘しているように、ここで注目した関連はごく弱いものであり、明確な性差を論じる証左としては不十分ではあろう。しかし、今後の研究テーマとしては多くの開拓可能性がうかがえる。

### 理想と現実の不一致と理想自己の志向性との関連について

本研究の、もう一つの特徴として、理想自己の志向性が持つ否定的な側面に注目しようとした点が挙げられる。理想自己が高い群の中で、理想と現実の不一致の高・中・低群に分けて、自己評価の比較を行っている。その結果より、理想自己が高く不一致を強く意識している群の自己評価が低いという点に注目し、理想自己の志向性が高い場合の否定的意味を指摘している。一方、理想自己を強く志向しながらも、理想自己と現実自己の不一致を意識しないものについては、自己対象化をうまくコントロールできている可能性を示唆している。理想自己の否定的側面にも注目したいという筆者の思いがうかがえる考察の一つであると思う。しかし、本研究で示された結果からは、不一致が大きい場合、理想自己が高すぎるのか、現実自己が低いのか、それとも双方の作用によるのかは明確ではない。また他方、理想自己の志向性が低い場合については分析結果は示されていない

<sup>1</sup> 慶應義塾大学 (Keio University)



が、理想自己に執着しないものの（理想自己と現実自己との）不一致と自己評価との関連はどのようになっているのか興味を引かれるところである。

### 理想自己の志向性について

理想自己の志向性とは、「こういう人間になりたい」という理想自己について、「実現していこう」「向かっていきたい」という意識を尋ねたものである。この理想自己の志向性は、“自己形成の程度（本研究では、理想の実現度や実現可能性という観点からとらえられている）とは正の関係にあること、また、その関係は未来における自己形成の予測の側面において特に顕著である”点が明らかにされた。また、理想自己の志向性が高いほど未来のイメージも良好であることが示唆された。つまり、理想自己を志向する意識は、未来を射程に入れながら今を生きる成長の原動力なのであろう。さらにこの意識は、過去を再構成しそれを意味あるものとして未来につなげる機能を果たすことがうかがえる。未来を見つめながら今を生きる青年にとって、理想自己の志向性は、現在を未来につなげ牽引していくエネルギーにもなっている。この“自己形成のメカニズム”は、大いに納得する結果である。

しかしその一方で、理想自己にはマイナス面も想定される。筆者自身指摘するように、理想自己が高ければ高いほど、それが満たされないときの挫折や絶望は大きいであろう。また、非現実的な理想に執着することによる抑うつや燃え尽きなども、理想自己の病理的側面として考えられよう。そのネガティブ面への注目は貴重な視点であるといえる。本研究のデータからは“十分にとらえることはできなかった”（36頁）とあるが、それは理想自己の志向性尺度項目が「…を実現していこう」「…に向かっていきたい」という健康な側面を尋ねるものであることにも由来していよう。現実自己に根付かないがゆえに、挫折や絶望に結びつく、あるいはそれを予感させる理想自己につい

ては、実現したいと必死で努力する一方で、「一切の荷を降ろして楽になりたい」「これ以上期待するのを止めにしたい」のようにネガティブな言葉でしか掬い取れないものかもしれない。

他方、本研究では、理想自己はありつつもそれに至る手段や行動が伴わない場合も、理想自己は否定的な影響をもたらすのではないかという仮説を掲げている。データからも、理想自己を実現するための具体的な手段と行動の必要性が示されている。たとえば理想自己は高い目標であっても、そこに至るまでの方途が把握できている限り、一歩を進めることができるだろう。また、その“もがき”そのものに価値を見出すことも可能だろう。しかし、“理想自己が行動の指針となるのも、理想自己がめざすべき対象として存在しうるから”（34頁）といわれるように、理想自己が明確な（具体的で、非現実的でない）対象として存在していることが重要になる（これは、都筑（1999）・白井（2001）をはじめとする時間的展望研究の成果とも符合する）。これを翻せば、理想自己がめざすべき対象として形を持たない場合には、そこに至る道筋も霧の中に埋もれてしまう。その結果、現在の自分そのものが揺らいでくる。蛇足ではあるが、理想自己を目指すかゆえの苦しみについて、夏目漱石（1952）の『行人』の一部を紹介したい。この著作には、語り手である「自分」（二郎）が、自らの生き方に悩み家族との関係でも懐疑心で安らげなくなった兄「一郎」の心の軌跡を辿る形で展開されている。その後半、魂の彷徨の旅に同行した兄の親友が、兄の心の葛藤について以下のように述懐する場面がある。

—「兄さんの苦しむのは、兄さんが何をどうしても、それが目的（エンド）にならないばかりでなく、方便（ミインズ）にもならないと思うからです。ただ不安なのです。従って凝としていられないのです。兄さんは落ち着いて寝ていられないから起きると言います。歩くただ歩いていられないから走る（かける）と言います。既に走（かけ出した以上、何処まで行っても止まれないと言います。その極端を想像すると恐ろしいと言いま

す。冷や汗が出るように恐ろしいと言います。怖くて怖くて堪らないと言います。」（342頁）—

本研究でも考察の中で、六宗（2001）を例に挙げ、自己の課題に直面しつつも理想との不一致を超えて進み続ける姿に、理想自己の持つ肯定的な意味を見出そうとしている。この苦しみが肯定的意味を持って読み取れるのは、課題（目的）が明確にあり、それと一致しない現在の自己の位置も明確に把握されているからであろう。両者の懸隔が目に見えぬがゆえのものがきであり、前向きな焦りといえるのではないだろうか。一方、「一郎」の苦しみは、理想自己（目的）が具体的な形を持つものではなく、そのためにそこに至る道も見えない。身近な家族（妻や両親）にも真実の心を見せず、その大きな“荷物を預かって貰う神”（383頁）さえも持たない。

もちろん、「一郎」が求める目的（エンド）と、本研究で取り上げた理想自己は同次元のものではないだろう（年代から言っても「一郎」はすでに妻子ある成人である。近代知識人としての苦悩を抱えた漱石自身が投影され、精神病理—鬱病とも分裂病（統合失調症）とも言われる—として論考されることから考えても、この「一郎」の苦悩を現代青年に一般化することはできない）。しかし、そのもがき苦しむ姿に、理想自己が、健康な自己形成のためのエネルギーとなる反面で、破壊的エネルギーを持つことをうかがい知れるであろう。自己を創造する青年期における理想自己は、ときに、自らを苦しめる自己破壊のエネルギーとして作用する。しかしそれは、現実という壁を突き破る道筋を得てはじめて未踏の自己を創造するエネルギーにも転換しうるものとなる。

ところが他方、現代青年といわれるものの中には、この「一郎」のようにもがき苦しむのと対極に、理想自己そのものを放棄し（未来や理想に執着せず）、刹那的に生きるものも増えている。理想自己そのものを持たない青年の存在は、先の見

えない今の世を生きるための一種の「方略」なのであろうか。それとも、理想自己との闘いに挑む前に自ら退却してしまった結果なのであろうか。現代的モラトリアムとして指摘される特徴の一つでもある。多様化する現代青年の自己形成プロセスを思うとき、理想自己研究にもさらなる未踏のテーマが隠されていることに大きな期待が持てる。今後も、データを積み重ねる中で自己形成プロセスの諸相を探索し続けていただきたい。

### 最後に

筆者自身、自己や他者に関する研究を行ってきたが、ここ数年、教育臨床の研究に足場を移していた。そのため、水間論文の真髓に迫るには力量不足・勉強不足の感がある。もし、誤解・曲解があればご指導いただきたい。

### 引用文献

- 水間玲子 2002 理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について—。青年心理学研究, 14, 21-39.
- 六宗 渉 2001 20人の大学生と対話して 溝上慎一編 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—。ナカニシヤ出版, Pp.15-18.
- 夏目漱石 1952 行人。新潮文庫。
- 白井利明 2001 <希望>の心理学—時間的展望をどうもつか—。講談社現代新書。
- 高田利武 1997 自己概念の特質と形成 加藤隆勝・高木秀明（編）青年心理学概論。誠信書房, Pp.33-49.
- 都筑 学 1999 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討—。中央大学出版部。（2003年4月30日受稿, 2003年6月18日受理）

## 水間論文「理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について—」に対するコメントへのリプライ

水間 玲子<sup>1</sup>

Reply to Two Comments on the Article: The Meaning of Intention  
Toward Ideal Self—An Investigation on Positive and Negative Aspects of It—

Reiko MIZUMA<sup>1</sup>

### 1. はじめに：論文においてめざしていたもの

今回、拙論「理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について—（水間，2002c）」（以下，“水間論文”と表記する）に対して、伊藤美奈子先生、高橋紀子先生の両先生からコメント論文をいただいた。お忙しい中、非常に示唆に富んだ論文をいただき、筆者に自らの研究に対する真摯な振り返りの機会を与えてくださったことに、まず深く感謝を申し上げたいと思う。

水間論文では、理想自己を意識し、その実現を求め、いわば、「理想とする方向へ自己を近づけていこう」という直接的な自己への働きかけを“理想自己への志向性”とした。そしてそこに伴う肯定的側面と否定的側面とを実証的に示すことをめざしていた。しかしながら、筆者自身、自己形成というテーマを考えるには、水間論文の問題設定自体があまりに限定されすぎていることを問題に思っていた。両先生からも、この目的に適した、より多様な視座をもつことの重要性を強くご指摘いただいたように思う。

以下、水間論文の問題点を整理しながら、両先生のコメントに答えていきたい。

### 2. 自己という問題

#### 2-1. 青年期の自己形成プロセスにおける水間論文の意義

青年期における自己形成を考える上で、水間論文の成果をいかに位置づけることができるだろうか。まず、この点について考えたいと思う。

大野（1995, p.90）が「青年期を子どもからおとなへの過渡期であり、おとなとしての自己を選択する時期と考えるならば、本質的に、青年期に自己への気づきと自己選択の迷いのあることが必然的である。ちなみに、人生、自己にかかわる重要な選択は、価値観の選択、進学、就職、友人関係、家の跡取り問題、結婚問題と、青年期を中心とした十数年に集中している。」と述べるように、青年期には自己に直面せざるを得ない様々な出来事が起こる。自己の再構成、アイデンティティ探求の過程がこの時期になされることも古くから知られている。そして、「いったん生きる中で自分の生き方が問題になったとき、その『自分』の不満を解決しないことにはその先満足して生きていくのは非常に難しい（溝上，1996, p.121）」のであり、普段は何も考えていないように見える者であっても、その者なりに自己の問題に直面したりする機会がある。

しかしながら、それらの問題にどの程度深い洞察をもって臨むのか、あるいは、どの程度あっさりとした決断を下していくのか、そこには個人差がある。後者の青年を見て、自己探求の青年像が年々後退し、希薄化している（cf. 加藤，1987）と論じる青年心理学者も少なくないであろう。しかしながら、そうとは言い切れないのではないだろうか。自己の問題に対しては、それにどう気づき、どう向き合っていくのかという、様々な反省のプロセスによってそれぞれ取り組みがなされているのではないだろうか。

さて、水間論文において「理想自己の志向性が高く、理想自己と現実自己の不一致の意識化が低い者」について、筆者が「自己対象化をうまくコントロールできていることを示しているのかもしれない」と考察したのは、以上のような意図によるものであった。青年期の自己探求プロセスとの絡みで、そこに該当する者は、「意欲はあるが今は取り組もうとしていない」、「モラトリアム下位分類のひとつ『延期』のあり方（下山，1992）」ではないか、というご指摘を高橋先生よりいただいたが、やはりそうとも言い切れないように思う。確かに、高橋先生のご指摘のように、深めるべき問題を深めず、その場をしのいでいる者もあろう。だが、どのレベルまで深めねばならないかは、問題の質もさることながら、その者がその問題にいかに関わりようとするのか、その向き合い方のプロセスに大きく依存しているように思うのである。それが理想自己であるならなおさらである。

理想自己を志向する際、自己にいかに向き合っているのか。たとえば、どの範囲までを“自己”として対象化し、どの範囲までをその時乗り越えるべき自己とするのか。また、求める自己と今ある自己との関係をどう受け止めるか。その個人差が非常に重要であろうと考えているのである。それによって、たとえば理想自己と現実自己の不一致が日常的にどの程度侵襲性をもつか、も異なってくるのではないだろうか。

つまり、自己形成のプロセスは一通りではな

い。そのプロセスのバリエーションを今後明らかに示していくことが大きな課題ではある。ただ、そのような様々なバリエーションが仮定されるとはいえず、“理想自己を志向する”というその心性自体は、「自己の成長感に対する主観的認知を変えよう」という点で、自己形成プロセスにおいて機能を果たす」ということを水間論文では示した。自己認知が変われば行動が変わる。そのため、自己を形成していく経験も変わっていく。理想自己への志向性は、結果として、自己形成プロセスにおいても実際に何らかの機能を果たすと筆者は考えるのである。

それが実際いかなる現象として描かれるのか。たとえば具体的なライフイベントとの兼ね合いでどう理解されるのかなどといった点については、個人の日常における自己へのはたらきかけのプロセスのもつ負荷の程度なども考慮しながら、実際的な姿を明らかにしていく必要がある。

#### 2-2. 青年期における理想自己の問題（1）

青年期の自己形成プロセスを考えるために理想自己を主題として扱うことに対して、しばしば指摘されることがいくつかある。

一つは、現実自己以外の様々な自己がある中で、なぜ理想自己なのか、という点である。たとえば義務自己や負の理想自己などが理想自己と並べて取りざたされるようになっている。Markus & Nurius（1986）が、理想自己や義務自己の他にも、良い自己、悪い自己、期待されている自己、恐れられている自己など、様々な可能自己を仮定することができる」と述べてからも久しい。現実自己とそれ以外の自己との関係が力動をもたらし、自己を形成していくという議論においても、理想自己以外にも多くの視点が存在する。

筆者が理想自己にこだわったのは、個人が自らの価値基準を何らかの形で淘汰し、自己全体に対して求めているものを扱える、比較的包括的な概念であると考えたからである。たとえば、「こうありたい」という自己像の表出を求めても、時にそれは、「こうありたくない」という形で回答さ

<sup>1</sup> 奈良女子大学文学部 (Nara women's university)

れることもある。また、それに対して、同時に「こうあらねばならない」と義務的な意味合いを個人がこめていることもある(水間, 2002a)。だがいずれにせよ、個人が自らの価値に基づいて「こうありたい」とした自己像であることには違いない。

水間論文では、そのような考えに立ち、個人にとって最も重要な理想自己を選択させるというステップによって、複数の可能自己が個人の基準によって淘汰され、ある一つの理想自己として集約されるであろうと仮定した。青年期における自己の再構成プロセスは、自らが判断し、決断していく場面に直面しながら進むことが多いことを考えても、個人が最終的に多くの中から選択して表出したものに注目するのは妥当であろうと考えた。このステップによって、個人がもっとも重要としている理想自己を扱い、それについて様々な検討を行っていくことができるようになる。

しかし一方で、このステップは個人が自己に対して抱いている複数の理想自己や、選択された理想自己に深く関わるころの他の様々な自己イメージについて扱えなくなるという弊害をもたらす。複数の理想によってもたらされる葛藤関係の程度は、最終的に選択された理想自己の意味づけやそれへの態度を決定づける背景となっている可能性もある(cf. Hook & Higgins, 1988)。青年期における自己の形成プロセスにおいては、理想と現実との狭間で苦しむ過程と共に、現実的な選択の場面に直面し、複数の理想の中で揺らぐ過程が存在する。理想自己の問題を考えていく上でも、結局は、最終的に一つの価値が選択されるまでのプロセスが重要となる場合も大いにある。時には、個人の理想自己が放棄されざるを得ないこともあるだろう。

実際の場面において、より具体的な問題として誰においても起こりうるという点では、むしろ「いかにその理想自己を選択したのか」という点の方がより現実的な問題であるかもしれない。自己形成プロセスを考えていく上でも、重要な視点である。選択された一つの理想自己のもつ意味は

水間論文で明らかにされたわけであるが、実際に一つの理想自己を選択するのか、そしてそれはいかなるプロセスをたどるのか。これらの、いわば、一つの理想自己に至るまでのプロセスにも注目していくことが必要であろう。

### 2-3. 青年期における理想自己の問題 (2)

理想自己を扱う際に指摘されるもう一つの問題点は、そこで表出された理想自己が、実際の日常においてどの程度意識され、また、実際の程度個人に影響を与えるものとなっているのか、という点である。心理学の調査研究では、被験者に内省させる段階が存在する。しかしながら、日常的にどの程度自己に目を向けているのかに個人差があることは知られているところである(Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。データに現れる自己が、個人の内面世界のすべてではないし、行為にあらわれるすべてでもない(溝上, 1999)。また自己に目を向けたとしても、「今のままの自分でよい」と思う意識のもとでは、理想自己までが意識されるとは限らない。意識における自己の問題、そしてその意識の仕方の問題、そのような点をいかにふまえていくか、また、それらを論じる必要性の有無も含め、これは、心理学における方法論も含めた今後の課題と言わざるを得ないように思う。

## 3. 水間論文主題「理想自己を志向する」に関して

### 3-1. 理想自己を志向するとは

高橋先生からは、冒頭において「『理想自己を志向する』とはどういうことか」という問いを投げかけられた。今更ながらではなるが、それは「理想とする方向へ自己を近づけていこうとする心性」である。“志向性(intention)”という言葉は、現象学での知見をもとに、ある対象に対する意識の関わり合いとして広義に理解されることが多いが、水間論文ではintentionalという言葉のもつより狭義な定義、“ある目標を意図し追求する”

という意識のあり方として用いている。そして、水間論文では、伊藤先生がすっきりとまとめてくださったように、その心性に伴う肯定的側面及び否定的側面、それらが実際に個人の意識にいかなる作用を及ぼしているのかという点、また可能であるならばそれらの相互関係までもつかみだしたいと思っていた。

そこで生じていた最大の問題点は、伊藤先生のご指摘にあるように、その心性を問う尺度の項目が理想自己の実現を求める健康な側面を尋ねるものであったという点であるように思う。理想自己の志向性が実際にネガティブな作用をもたらす場合、その理想自己との関係は、伊藤先生のご指摘されたような「一切の荷を降ろして楽になりたい」といった言葉でしかとらえられないものなのかもしれない。

肯定性と否定性とがそれぞれ独立した次元として存在し、否定性が肯定性の対ということ以上の意味をもつことは周知のこととなっている(cf. 溝上, 1999)。しかしながら実際には、ある事象の肯定的側面と否定的側面とを検討しようとしながらも、肯定性次元の事象に対して、肯定的な変数と否定的な変数との関係を検討しようとしてしまう手続きをとってしまうことが少なくない。水間論文でも、結果として、肯定性・否定性の双方に掛かる問題を、いずれかの同一次元上で論じてしまうということになってしまっていたのである。理想自己の志向性を測定する時点で、その両次元に対する洞察が必要であった。両先生のご指摘されたように、理想自己の実現を望まない、あるいは望みたくても望めないといった心性も含めてとらえられるようにすると、より示唆的な結果が得られたであろうと思われる。

ところで、「理想自己を志向する」ことについての「志向性の低い群となった中には、実現への意欲が低い群だけでなく、現時点である程度実現できているために、敢えて意欲的になる必要のない群が混在する」という高橋先生のご意見についてであるが、確かにその可能性はある。水間論文の目的からいうと、それらの区別は直接的に関

わってくるものではないが、理想自己の志向性を線形的に一次元で扱う限り、その低い者に多様な意味が含まれているということは考慮すべき事柄であった。また、そのような理想自己の志向性の低い群の心性は、次に述べる“理想自己自体の変化可能性の問題”にも関わることであるが、データとして何が現れているのかをじっくり吟味するためにも必要な視点であると考えられる。

### 3-2. 理想自己自体の変化可能性の問題

水間論文では、対象となる理想自己は質問の基盤となる。それを中心に、その実現を求める程度や、過去から現在及び現在から未来にわたるその方向への現実自己の変化の程度を尋ねた。

この方法に関して、高橋先生から「理想自己を固定的に扱う弊害」についてのご指摘をいただいた。人は経験によって自己とともにそれを支える価値をも内在化していき、その一部が理想自己としてとらえられるようになる。つまり、日々経験を重ねながら、理想自己自体も多様に変容していく。理想自己を支える個人の価値意識が、経験とともに形成されていく(溝上, 1999; 水間, 1998)。また、理想自己も現実自己と同様、他者との相互作用の中で生成されることが知られている(Drigotas, Rusbul, Wieselquist, & Whitton, 1999)。高橋先生のご指摘のように、様々な理想の中で揺れ動きながら分化と統合を重ねていく(伊藤, 1993)形での変容もある。そうでなくとも、いつ、それまでとは異なるものが個人において最も重要なものとされるようになるかは未知である。これをふまえた時、水間論文で論じた“過去—現在—未来”の時間軸上での理想自己と現実自己との関係は、どう理解されるだろうか。

ここでいう過去や未来は、あくまでも主観的な時間軸の広がりである。現在という時間において、自らの理想自己の方向への変化をどう認知しているのかという点は、すなわち、自己の変容に対する個人の構えにもつながると思われる。2-1で述べたことの繰り返しになるが、個人が経験を重ねる際に自己が大きく影響することは多くの研究に

よって示されている(水間, 2002b 参照)。ならば, 個人がその時点で, 過去や未来における自らの成長をたとえば主観的にでも感じとっているか否かという点は, 自己形成におけるサイクルに影響を与える一つの要因になるであろうと思われたのである。

その点では, 水間論文の結果は, 少なくとも自己形成プロセスにおける主体の側の影響に関する一つの枠組みを提供するという点では意味があると思われる。だが再度述べるが, 実際にそれがどう動くのかそのプロセスを考えていく際には, 表出された理想自己がいかなる土壌からいかに選択されたのか, また, それが現実的な世界との関係においていかに変容していくのか, その点に踏み込んでいく必要がある。

### 3-3. 理想自己の内容との関係について

水間論文における理想自己表出の過程については, 伊藤先生から「対話」の形として抽出しようという意図がうかがえる」というコメントをいただいた。伊藤先生は, それを従来の方法との比較において評価してくださっている。しかしながら, 水間論文ではその方法を生かしきれておらず, 先生の「理想自己の中身によって, どんな特徴が見出せるのだろうか」「理想自己の内容による分類やデータ全体を生かした分析の工夫ができればどんな展開がありうるだろう」という興味についてこたえるような分析には至っていない。

理想自己の内容を実際に表記するまでには, おそらく「イメージ・表象化→言語化→表記」というプロセスが存在する。そしてそこに感情が伴う場合, そのプロセスには抵抗も生じよう。それゆえ, 結果として同じ内容の理想自己が表記されていたとしても, 理想自己の背景・文脈, そしてそれが意味するところをどの程度くみとることができるのかは非常に難しい。加えて, それが肯定的意味をもつのか, 否定的意味をもつのかという点さえも異なってくる。水間・溝上(2001)では, 自己評価の規定要因の検討において, 最終的に表記された内容のみならず, それに対する補足説明

も併せて検討するという方法をとっている。水間論文でもまず WHY 答法を用いてその者の自己の世界に言及させたのち, 理想自己の内容を書かせるという手続きをもっている。もしも理想自己の中身に踏み込んで考えていかなければ, その自己評価規定要因の内容までふまえて検討していくべきであろう。理想自己の志向性の構造に関しては内容ごとの検討も行ったが(水間, 2001), まだまだ掘り下げていく余地は多分に残っている。しかしながら, 単なるカテゴリーごとの分析にとどまらず, より個人の文脈を考慮した検討を進めていくには, 上記の事柄をふまえながら理想自己の中身を見ていくことが必要であろう。

### 3-4. 現実自己との関係の問題

理想自己を志向することの否定的側面について, 水間論文では自己評価との関係によって明らかにしようとした。この点について, 伊藤先生より, この関係は, 考察の余地を多大に残していることをご指摘いただいた。特に, この関係における性差の問題は, 伊藤先生の述べるとおり「開拓可能性」を十分に有している。特に, 女性における個人的基準否定的自己評価と理想自己の志向性との有意な正の関係, そして男性における個人的基準否定的自己評価と理想自己の志向性との有意な負の関係は, 水間論文にも述べてきたが, いかに理想自己が志向されるのか, その過程を考えていく上で今後注目すべき点であると筆者自身も考えるところである。この点に注目することによって, 水間論文で自己評価を4次元尺度でとらえた意味もより明瞭になる。

水間論文で論じてきた, 実現がめざされる理想自己とは, 多様な社会的価値の中から自らの選択した価値基準である。それ故か, 理想自己の志向性の高低という点では, これまで男女差はみられなかった。しかしながら, 理想自己の志向性と自己評価との関係においては男女差が指摘された。そしてそこからは, 理想自己の志向性と自己評価との関係は, 単に理想自己の志向性のもつ肯定的・否定的特徴をとらえていくためのものにとど

まらず, それぞれがより理想とする自分の姿をいかに思い描き, いかに志向するかに関わる, 力動的なプロセスにもアプローチしていく端緒となる可能性を示していると思われる。

### 4. おわりに

今回, 自らの論文に対するコメントに対して, 公の場においてリプライするという場を初めていただいた。自らの論を公刊するということの責任を改めて受け止めた次第である。

問題点を自分自身でも感じていた論文に対して両先生からいただいたコメントは, それについての自己批判をより自覚させるものであったと同時に, 今後の研究の可能性を拓いてくれるものでもあった。今後の課題はあまりに多く, しかも内容的にも困難なものが多いが, より興味深い知見に出会えるよう, 日々研鑽を重ねていきたい。

### 引用文献

- Drigotas, S.M., Rusbult, C.E., Wieselquist, J., & Whitton, S.W. 1999 Close partner as sculptor of the ideal self: Behavioral affirmation and the Michelangelo phenomenon. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 293-323.
- Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Hook, E.V. & Higgins, E.T. 1988 Self-related problems beyond the self-concept: Motivational consequences of discrepant self-guides. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 625-633.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 64, 115-122.
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造—その変容と多様化—. 誠信書房.
- Markus, H. & Nurius, P. 1986 Possible selves. *American Psychologist*, 41, 954-969.
- 溝上慎一 1996 生き方における「自分」とは? 人間教育研究協議会(編)教育フォーラム19: <生きる力>を育てる. 金子書房, pp.113-125.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム—. 金子書房.
- 水間玲子 1998 自己研究における「価値」—その位置づけと検討意義について—. 京都大学教育学部紀要, 44, 192-204.
- 水間玲子 2001 自己形成における理想自己の内容の問題. 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 142-143.
- 水間玲子 2002a 「理想自己」における理想的意味合いと義務の意味合い. 日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 63.
- 水間玲子 2002b 自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題—個人の主体性の問題—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 429-441.
- 水間玲子 2002c 理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について—. 青年心理学研究, 14, 21-39.
- 水間玲子・溝上慎一 2001 大学生の適応と自己の世界—自己評価とそれを規定する自己—. 溝上慎一(編)大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—. ナカニシヤ出版, pp.19-46.
- 大野 久 1995 青年期の自己意識と生き方. 落合良行・楠見孝編 講座生涯発達心理学4: 自己への問い直し—青年期—. 金子書房, pp.89-123.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティ発達との関連で—. 教育心理学研究, 40, 121-129.

(2003年8月20日受稿, 2003年10月23日受理)